

霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針



令和元年（2019年）6月

長野県環境部自然保護課

長野県諏訪地域振興局環境課

はじめに（本機能強化方針のポイント）

近年の自然公園の利用形態として、自然とのふれあいを求めるニーズが多様化（インバウンド）・高度化（質の高さ、新鮮味）する傾向が見られます。このような背景から、長野県では、霧ヶ峰、乗鞍、美ヶ原、志賀高原の県下4か所に設置された「自然保護センター」を豊かな自然とふれあうエコツーリズムの推進拠点として活用を図るための方向性を定めた「信州ネイチャーセンター基本方針」を平成30年9月に策定し、霧ヶ峰自然保護センターにおいて先行的に検討を進めました。

霧ヶ峰地域では、平成21年に「霧ヶ峰の今と未来 ～霧ヶ峰再生のための基本計画～」が策定されており、同計画に基づき霧ヶ峰の保全・再生の活動やエコツーリズムの取組が進められています。

霧ヶ峰自然保護センターは、自然公園の利用指導や情報提供、自然保護活動の拠点として昭和48年に設置されていますが、地域の核となってエコツーリズムを推進する取組が必ずしも十分ではありませんでした。そのため、エコツーリズムの拠点として機能強化を図るための方策をとりまとめた「霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針」を、このたび策定しました。

この「霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針」のポイントは主に3つあります。

一つ目のポイントは「多彩な自然体験プログラムの提供」です。現在、自然保護センターで実施している短時間のプログラム（無料）に加え、民間ガイド事業者等によるツアーデスクを設置し、利用者ニーズに応じた自然体験プログラム（有料）を展開するとともに、質の高いガイドツアーを担う人材の裾野を拡げるため、霧ヶ峰インタープリター養成講座と連携した研修会を開催する等を通じてガイドの育成を図ることです。

二つ目は「自然保護センター及び周辺の魅力を高める施設整備」です。自然保護センターについて、悪天候でも霧ヶ峰の魅力を伝えることができるよう展示の充実を図るとともに、休憩機能の強化を図ることです。また、自然保護センター前の草原に電気柵を設置する等により、植生の回復を図りエコツアーフィールドとしての魅力を再生することです。

三つ目は「多様な主体の参画による管理運営体制の強化」です。今後、自然保護センターがエコツーリズムの拠点としての役割を果たすためには、地域で活動する様々な主体との連携・協働が不可欠であり、地域関係者との連絡組織を設立し、連携・協働した取り組みを進めることで管理運営の質の向上を図ることです。

今後は、本機能強化方針に基づき、地域関係者と連携・協働による取組や霧ヶ峰自然保護センターの充実を通じて、霧ヶ峰地域のエコツーリズムの推進を図ります。

令和元年6月

目次

第1章 霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針策定について	
1 機能強化方針策定の背景と目的	1
3 機能強化方針検討の経緯	2
3 機能強化方針検討の経緯	2
第2章 霧ヶ峰のあらまし	
1 霧ヶ峰の自然、歴史・文化	4
2 霧ヶ峰の観光、エコツーリズム	6
3 霧ヶ峰自然保護センター	10
第3章 霧ヶ峰自然保護センターのビジョン及びコンセプト	
1 ビジョン及びコンセプト	11
2 近隣ビジターセンターとの連携	12
第4章 霧ヶ峰自然保護センターの機能強化方針	13
方向性1 質の高い自然体験プログラムの提供	14
方向性2 地域の総合的な情報発信・提供機能の強化	20
方向性3 霧ヶ峰の魅力を伝える展示等の充実	23
方向性4 ガイド人材の育成	25
方向性5 エコツアー関係者の交流・連携体制の構築	27
方向性6 センター及び周辺フィールドの整備	29
方向性7 自然環境の保全・再生	31
方向性8 近隣施設等との連携	33
方向性9 多様な主体の参画による管理運営体制の強化	35
(参考) 施設整備のイメージ	37

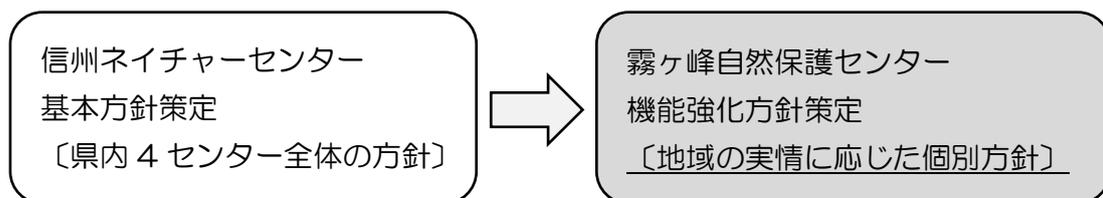
【別冊】霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針に関する資料集

第1章 霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針策定について

1 機能強化方針策定の背景と目的

近年の自然公園の利用形態として、自然とのふれあいを求めるニーズが多様化（インバウンド）・高度化（質の高さ、新鮮味）する中、長野県では、霧ヶ峰、乗鞍、美ヶ原、志賀高原の県下4か所に設置された「自然保護センター」を豊かな自然とふれあうエコツーリズムの推進拠点として活用を図るため、目指すべき姿、基本コンセプト、施設運営体制、広域連携のあり方など、自然保護センター共通の課題に対応するための方向性を定めた「信州ネイチャーセンター基本方針」を平成30年9月に策定した。信州ネイチャーセンター基本方針では、「民間ガイド事業者によるツアーデスクの導入」「ツアーガイドの養成」「広域連携の強化」が主なポイントとして挙げられている。

当該基本方針に基づき、4つの自然保護センターについては、それぞれの実情に応じて機能強化方策を検討することとしており、霧ヶ峰自然保護センターが先行的に検討を進めることとなった。



霧ヶ峰地域では、平成19年に霧ヶ峰に関わる団体の代表が一堂に会し、霧ヶ峰の保護と利用のあり方について総合的に協議・検討し、100年後に残すべき霧ヶ峰の姿を描き実現するため、霧ヶ峰自然環境保全協議会が設立されている。平成21年には霧ヶ峰自然環境保全協議会により「霧ヶ峰の今と未来 ～霧ヶ峰再生のための基本計画～」が策定されており、同基本計画に基づき霧ヶ峰の保全・再生の活動が進められている。

また、基本計画の策定に際して、霧ヶ峰の特性を生かしたエコツーリズムの検討を行うため「霧ヶ峰エコツーリズムモデル構築部会」が設置され、霧ヶ峰インタープリテーション指針を含む「霧ヶ峰エコツーリズムモデル構築計画」を取りまとめている。

霧ヶ峰自然保護センターは、自然公園の利用指導や情報提供、自然保護活動の拠点として設置されているが、地域の核となってエコツーリズムを推進する取組が不足している。そのため、上記のような地域の取組と連携したエコツーリズムの拠点として機能強化を図るため、霧ヶ峰自然保護センターが目指すべき姿や、エコツーリズム推進に必要な機能強化の具体策をとりまとめた「霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針」を定めるものである。

2 検討対象範囲

本機能強化方針は霧ヶ峰自然保護センターを対象とするものであるが、霧ヶ峰のエコツアーリズム推進の観点から、霧ヶ峰地域全体を視野に入れた検討を行った。

なお、本機能強化方針における霧ヶ峰地域については、霧ヶ峰自然環境保全協議会の協議・検討対象区域と同様に、以下の範囲と定義する。

【本機能強化方針における霧ヶ峰の範囲】

八ヶ岳中信高原国定公園の特別地域（第一種、第二種、第三種及び特別保護地区）のうち、ピーナスライン沿線の概ね強清水、鷲ヶ峰、大笹峰、車山乗越、大門峠、富士見台、ガボッチョ山、踊場湿原を結んだ線の内側の区域（諏訪市、茅野市、下諏訪町の2市1町にまたがる区域）



3 機能強化方針検討の経緯

機能強化方針を策定するため、霧ヶ峰の観光やエコツアーリズムに関する地域関係者や有識者等からなる「霧ヶ峰自然保護センター機能強化検討会」を設置した。計3回の検討会を実施し、目指す姿、センターの有すべき機能とその強化策、管理運営体制等について議論した。

■検討会の開催概要

検討会	日時	場所	内容
第1回	平成30年 9月11日(火) 14:00~16:10	霧ヶ峰自然 保護センター 研修室	○検討会の概要 ○霧ヶ峰のエコツアーリズム及び自然保護センターの現状 ○自然保護センターのコンセプト及び機能強化の方向性 ※検討会前に霧ヶ峰自然保護センターの現地視察を実施
第2回	平成30年 11月13日(火) 9:00~11:20	諏訪合同庁舎 講堂	○自然保護センターのコンセプト及び機能強化の方向性 ○自然保護センターの機能強化方針(案)
第3回	平成31年 2月8日(金) 14:30~16:50	諏訪湖流域 下水道事務所 大会議室	○霧ヶ峰自然保護センター機能強化方針(案) ⇒委員了承

■霧ヶ峰自然保護センター機能強化検討会の構成

	所属等
有識者	笹岡 達男 (東京環境工科専門学校 校長 :座長)
	海津 ゆりえ (文教大学国際学部観光学科 教授 :座長代理)
行政	環境省信越自然環境事務所国立公園課 課長
	林野庁中部森林管理局南信森林管理署 総括森林整備官
	諏訪市市民部生活環境課 課長
	諏訪市経済部観光課 課長
	茅野市市民環境部環境課 課長
	茅野市産業経済部観光まちづくり推進課 課長
	下諏訪町産業振興課 課長
	長野県諏訪地域振興局商工観光課 課長
	長野県環境保全研究所自然環境部 主任研究員
地権者	下桑原牧野農業協同組合 代表理事組合長
観光	諏訪観光協会 事務局長
	ちの観光まちづくり推進機構 事務局長
	下諏訪観光協会 事務局長
	車山高原観光協会 協会長
ガイド事業者	KiNOA 合同会社 霧ヶ峰インタープリテーション事業部長
自然保護	霧ヶ峰パークボランティア 運営委員
関連施設	霧ヶ峰ビジターセンター連絡会 代表

第2章 霧ヶ峰のあらまし

1 霧ヶ峰の自然、歴史・文化

霧ヶ峰は長野県の中中部にある八ヶ岳中信高原国定公園の中央に位置し、主峰車山（1,925m）周辺の概ね標高1,500m～1,900mに広がる高原であり、広大な草原に、高層湿原や樹叢が点在し、独特の景観や生態系が形成され、なだらかな稜線が広がる風景や植物の豊かさは多くの人々を魅了している。

また、草原は周辺の集落が採草地として利用することで維持されてきたものであり、旧石器時代の黒曜石加工の遺跡など、人と自然との密接な関わりを示す歴史・文化的資源も多く、エコツーリズムに適したフィールドと考えられる。

一方、生活様式や環境の変化により、草原の森林化、湿原の乾燥化、シカ食害、外来種繁茂など霧ヶ峰の特徴的な景観や自然環境が失われつつあり、地域関係者による保全・再生の活動が行われている。

（草原）

霧ヶ峰の草原は、周辺集落の人々の採草により維持されてきた半自然草原である。江戸時代には周辺集落の農耕用牛馬の飼料や田畑の肥料として草の需要が高まり、全山にわたる本格的な採草が行われるようになった。

霧ヶ峰の草原は、周辺集落の人々の採草と草の生産能力を維持するための火入れ（野焼き）により維持され、長い年月をかけて独自の植生が形成された。（近年の研究では縄文時代から火入れが行われてきた可能性が指摘されている）

しかし、農業の機械化や化学肥料の普及に伴って草の需要が減少し、昭和30年代の半ばを境に本格的採草が行われなくなった。そのため、草原に樹木が生えて森林化が進行しているほか、植生の変化が進んでいる状況がある。

霧ヶ峰の草原には、初夏から秋にかけてニッコウキスゲ、ヤナギラン、ノアザミ、オミナエシ、マツムシソウ等に代表される数多くの花々が見られ、なだらかな山の稜線の起伏とともに広がる緑の草原景観とあいまって、重要な観光資源にもなっている。



車山の草原

（湿原）

霧ヶ峰には八島ヶ原湿原、踊場湿原及び車山湿原の3つの高層湿原がある。霧ヶ峰の高層湿原は、貧栄養の土壌成分や酸性水質、低温といった特殊環境で、主に枯れたミズゴケ類が腐食せずに堆積した泥炭層の上に新しいミズゴケ類が生長していくことで形成される。そのため、湿原部分が付近の水面より高く盛り上がる特徴がある。



八島湿原

3つの湿原は、いずれも学術的に貴重であり、一部の樹叢及び周辺の草原とともに国の天然記念物に指定されている。また、キリガミネヒオウギアヤメほか、この地で発見命名された植物も多い

(樹叢)

霧ヶ峰には、草原に浮かぶ島のように樹木が繁茂している原生的な樹林(樹叢)が点在している。樹叢は、岩石が露出していたり、沢筋や凹地で水条件がよかつたりと、採草や火入れに不適な箇所が多く、人手があまり加わらず自然林に近い状態を保っているため、小動物のすみかともなっている。



自然保護センター前の樹叢

(歴史・文化)

霧ヶ峰と人の関わりは非常に古く、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く存在する。黒曜石の一大産地である和田峠に近いことから、八島遺跡等、旧石器時代の黒曜石加工に関わる遺跡があり、霧ヶ峰南部のジャコッパラ遺跡群には諏訪地方最古級(約3万年前)の遺跡や縄文時代の落とし穴遺構がある。また、鷲ヶ峰西側の星ヶ塔遺跡からは縄文時代の黒曜石鉞山が発見されている。霧ヶ峰産黒曜石の矢じり、槍先形尖頭器等は、現在の関東地方、中部地方等で多数発見されているほか、縄文時代の遺跡としては遠く青森県の三内丸山遺跡でも見つかっている。

また、平安時代から中世の遺跡も多い。特に旧御射山遺跡は、鎌倉時代に幕府の庇護を受けて全国の武士が集まり盛大に行われた御射山祭を偲ばせる遺跡であり、祭祀に使われた薙鎌や馬具類等鉄製の道具及び素焼きの皿である「かわらけ」などが多数出土しているほか、旧御射山神社前の広場を囲むように、かつて祭の見物席であった栈敷の遺構がある。

このように古代から中世にかけての多くの文化財は遺跡として残るものであるが、近世以降の本格的採草により完成された霧ヶ峰の草原を含め、霧ヶ峰の空間全体が人との関わりで形成された文化的遺産の側面を持っている。

さらに、島木赤彦の短歌、随筆をはじめとする近代文学の題材となり、また、深田久弥、藤原咲平、柳田国男等様々な分野の文化人が訪れて霧ヶ峰で「山の会」が催されるなどの文化的側面もある。

さらに、昭和初期にいち早く池のくるみ(踊場湿原)にスキー場が開発され、霧ヶ峰グライダー研究会が設立されるなど、スポーツとの関わりも深い。



旧御射山神社周辺の階段状遺構

(出典) 霧ヶ峰再生のための基本計画(平成21年)

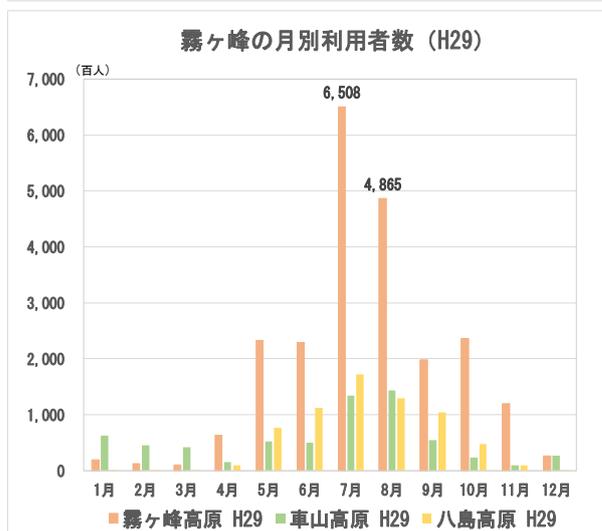
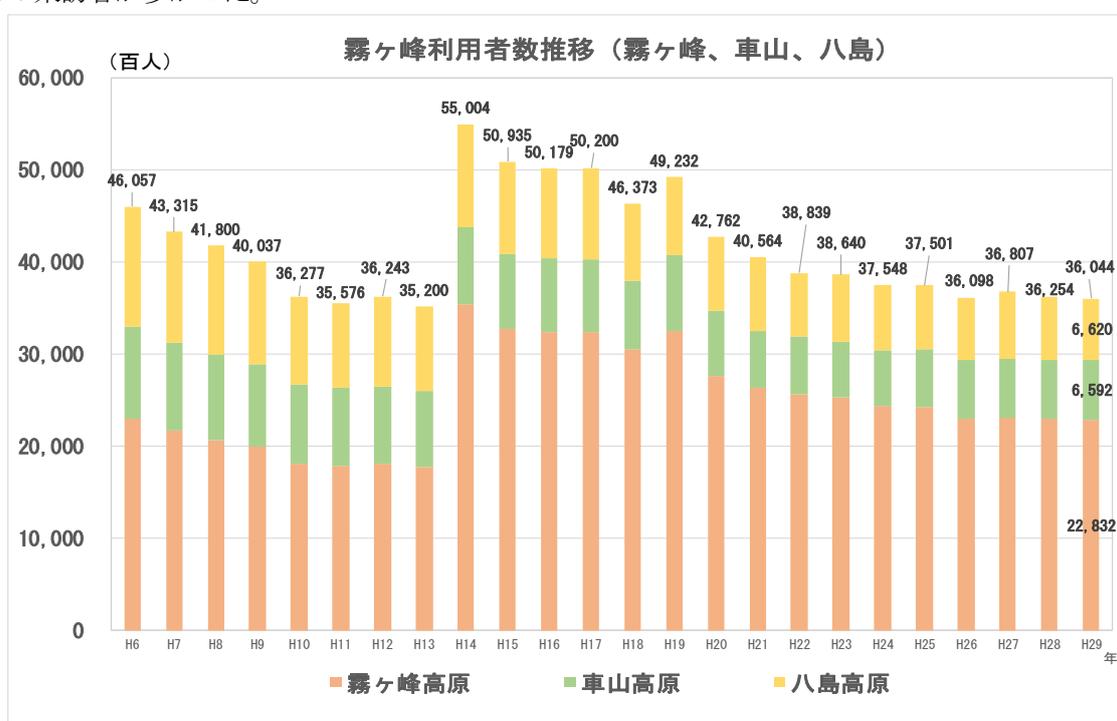
2 霧ヶ峰の観光、エコツーリズム

(1) 霧ヶ峰の観光動向

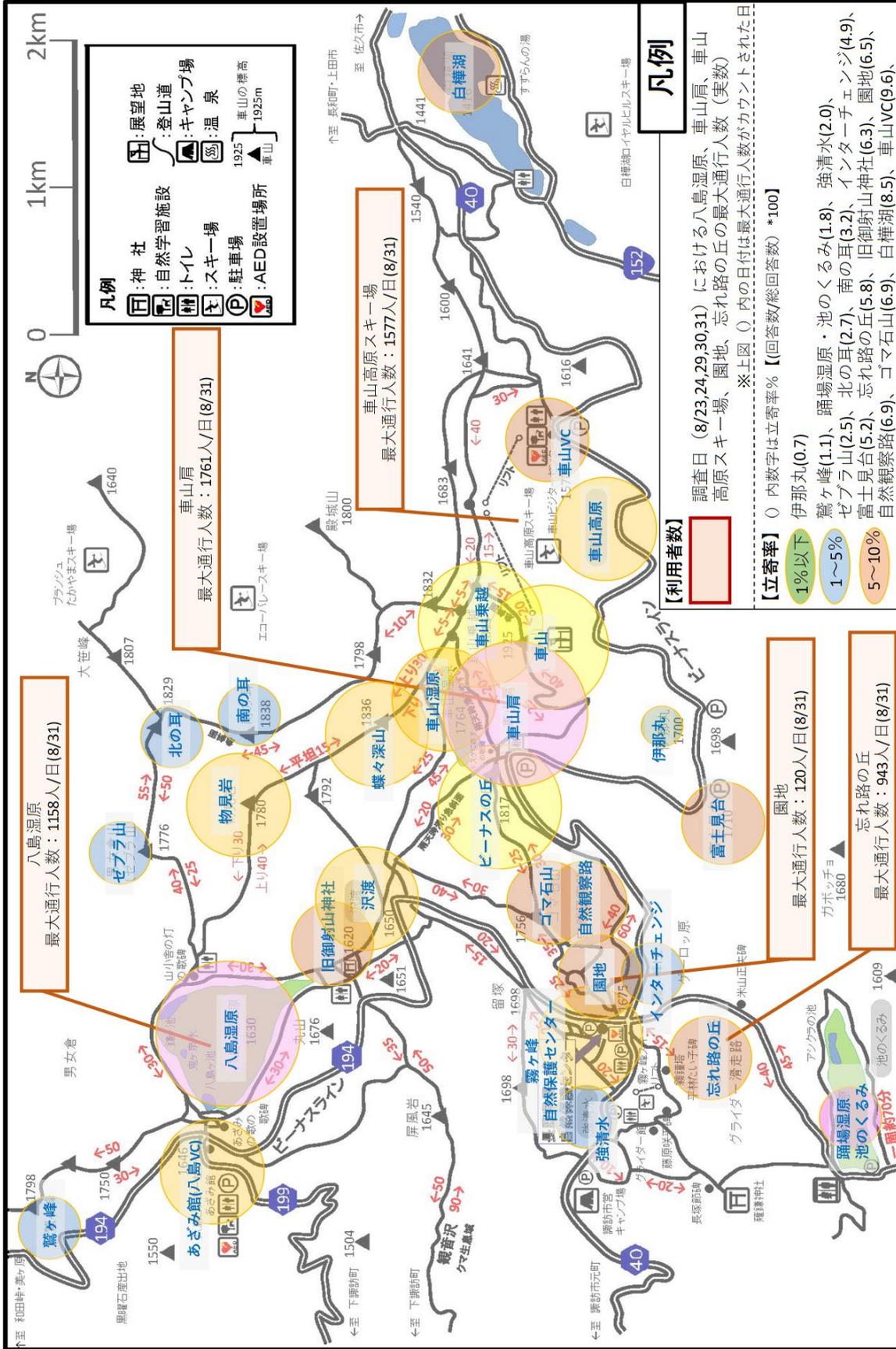
平成29年の霧ヶ峰全体（霧ヶ峰高原、車山高原、八島高原の合計）の観光客は約360万人で、近年は減少傾向にある。観光利用のピークは7、8月であり、観光客の約半数がこの時期に集中している。そのため、自動車の渋滞、歩道の混雑などの環境負荷が生じており、利用の平準化が課題となっている。さらに車山肩や八島湿原など特定箇所への利用の集中もみられる。

また、霧ヶ峰の観光スタイルは滞在時間が短い「通過型」が主流であり、日帰客が9割を占めている。エコツーリズムの取組を推進することで、これを「滞在型」へと転換し、地域での観光消費を上げていくことも期待されている。

外国人観光客について、霧ヶ峰地域の統計はないものの、平成28年外国人延べ宿泊者数調査（長野県）によると、諏訪市、茅野市の外国人延宿泊者はともに約3万人であり、台湾や中国からの来訪者が多かった。



出典：観光地利用者統計調査（長野県）



平成20年の夏季繁忙期(8/23,24,29,30,31)における観光客の行動態調査について

【通行人数】八島湿原、車山肩、車山高原スキー場、園地、忘れ路の丘でカウントした通行人数

【立寄率】八島湿原、車山肩、車山高原スキー場、園地、忘れ路の丘で来訪者2000人に調査票を配布し、得られた554通の回答(回収率27.7%)を元に立寄率を算出。

霧ヶ峰の地点別の利用状況

<出典>平成20年度 地方の元気再生事業ビーナスライン交通量・利用客行動態調査業務委託諏訪市四賀霧ヶ峰他 報告書

(2) 霧ヶ峰のエコツーリズム

霧ヶ峰でのエコツアー等のプログラムについては、霧ヶ峰自然保護センターや車山ビジターセンターが実施するものや、民間ガイド事業者等が実施するものがあり、八島湿原等におけるガイドウォーク、ナイトツアー、冬季にはスノーシューツアー等が実施されている。

霧ヶ峰自然保護センターでは、センター周辺の身近な自然を案内する1時間のガイドウォークを毎週末（7・8月の可能な日は毎日）開催している他、霧ヶ峰の夜を家族で味わえるナイトウォーク（年数回）、白銀の世界を家族で散策するスノーシューイベント等を開催している。

霧ヶ峰では、平成21年度に霧ヶ峰自然環境保全協議会が「霧ヶ峰の今と未来～霧ヶ峰再生のための基本計画～」が策定されており、当該基本計画には「霧ヶ峰インタープリテーション指針」が位置付けられている。霧ヶ峰インタープリテーションは、霧ヶ峰という自然環境が与える非日常的な空間と時間の中で、インタープリターとの「共感」を通して参加者に「安らぎ」や「安心感」を得てもらうことを理念としており、この考えに基づいて案内するガイドを「霧ヶ峰インタープリター」と位置付けている。

霧ヶ峰自然保護センター、八島ビジターセンター、車山ビジターセンターで構成する霧ヶ峰ビジターセンター連絡会においては、霧ヶ峰インタープリター養成講座を実施しており、現在20名程度インタープリターが活躍している。

霧ヶ峰インタープリテーション指針等に位置付けられた、霧ヶ峰ならではのエコツーリズムの魅力（強み）と、エコツーリズムを推進する上での現在の問題・課題としては以下が挙げられる。

■霧ヶ峰ならではのエコツーリズムの魅力（強み）

*霧ヶ峰にしかない以下の資源・魅力を有し、穏やかな草原を基調にした人をやさしく迎え入れる非日常的空間が安らぎ、安心、共感を提供する。

- 草原と湿原、樹叢が織りなす多様な自然の容姿と彩り
- 人と自然との深い関わり
- 古代から中世、近世、現代へと連なる歴史、時空の広がり

■エコツーリズム推進上の主な問題点、課題

*インタープリター養成に取り組んでいるが、ガイド数が十分ではない。（ガイドを生業の一部とする人材の充実のための需要創出と、団体等受入時のガイドの安定供給の両面が課題）

*霧ヶ峰のエコツーリズムに関する一元的な情報発信・受け入れ態勢がない。

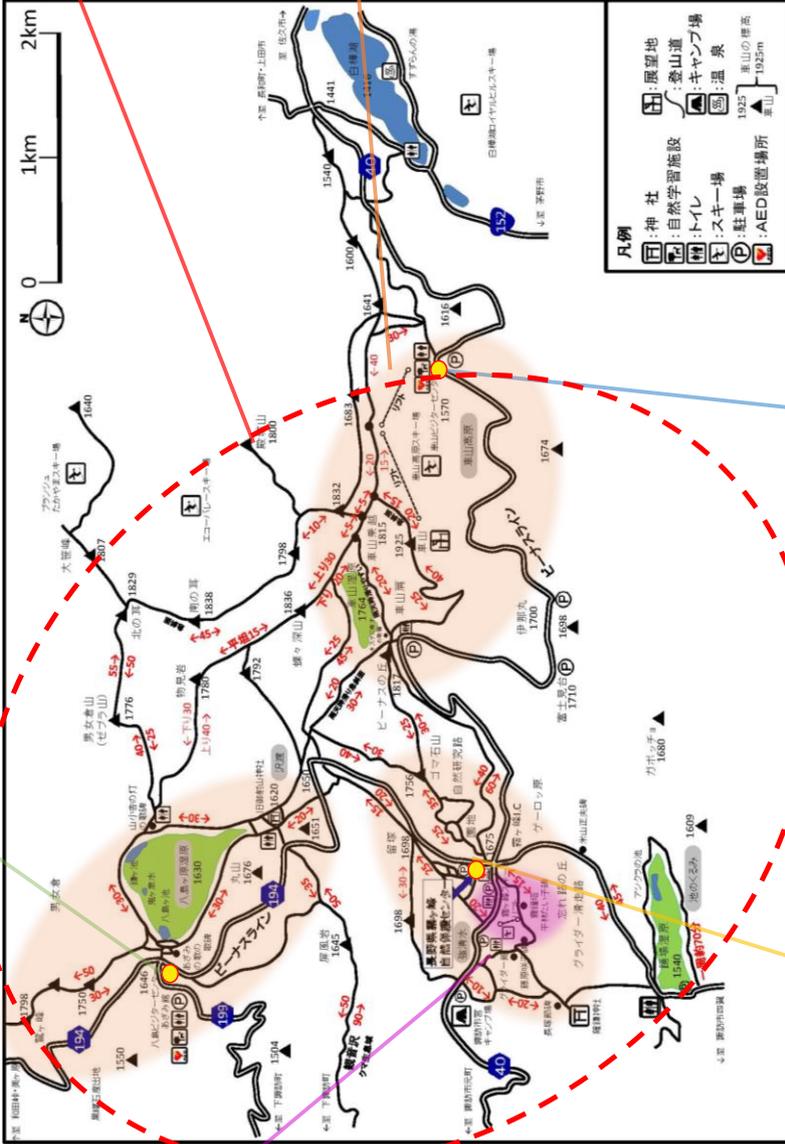
*霧ヶ峰のエコツーリズムの楽しみ方が十分に認識されていない。

*来訪した当日にツアーを提供できる体制ができていない。

霧ヶ峰におけるエコツアー等実施状況

八島ビジターセンター
 センター利用者数：34,290人
 運営主体：下諏訪町 職員数：常駐2名(スタッフ6名)
 【主なプログラム】
 ※1130からはガイドウォークを実施していない。

【プログラム利用者数】
 ○ガイドウォーク (H29年) 約 5,300人
 【プログラム価格帯】
 1人1,500円



諏訪観光協会
 【主なプログラム】
 ●「霧ヶ峰で朝食を」(バスツアー、マイカープログラム)
 【プログラム価格帯】
 バス：3,000円、マイカー：1,500円



霧ヶ峰自然保護センター
 センター利用者数：14,055人
 運営主体：長野県 職員数：常勤2名、夏季臨時職員1
 【プログラム価格帯】
 保険料 100円
 【利用者数】
 ●ガイドウォーク (H29年) 178人
 ●ナイトプログラム (H29年) 3人

霧ヶ峰自然教室
 【主なプログラム(霧ヶ峰全体)】
 ●ガイドウォーク無雪期
 ●ルートガイド無雪期
 ●フルムーン・ディーンク無雪期
 ●1泊2日ガイド無雪期
 ●出前講座(随時)
 【プログラム価格帯】
 1人1,500～11,200,000円程度

車山自然遊学塾
 【主なプログラム(主に車山周辺)】
 ●ナイチャーカーガイド
 ●ナイトハイイク
 ●スノーシューツアー
 ●ガイド派遣(随時)
 【プログラム価格帯】
 1人1,500～11,200,000円程度



車山ビジターセンター
 運営主体：車山高原観光協会 職員数：2名(専任1名)
 【プログラム価格帯】
 1人1,500～11,200,000円程度
 【プログラム利用者数】
 ●ナイトハイイク (H29年) 797人
 ●星空とお散歩ツアー (H29年) 900人
 ●スノーシューツアー (H29年) 140人

3 霧ヶ峰自然保護センター

霧ヶ峰自然保護センターは昭和 48 年に設置された施設であり、県直営による管理運営が行われてきた。

霧ヶ峰自然保護センターの平成 30 年の利用者は 13,993 人となっており、近年は減少傾向にある。また、地域全体の観光客に対して、センターへ立ち寄る観光客の割合は低い。

所在地	諏訪市四賀霧ヶ峰 7718-9
建築面積(構造)	575.00m ² (RC 平屋建)
運営	長野県(諏訪地域振興局環境課)
開館期間	4月15日～11月15日
休館日	毎水曜日(祝日の場合は翌木曜日)
職員体制	開館時:常勤2名、 夏期臨時(7～8月1名)
主な機能	自然公園管理とビジターセンター
周辺駐車場	北側 50 台、霧の駅側 185 台

表 霧ヶ峰自然保護センターの月別利用者数

来館者	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計
H30年	525	1,173	1,834	3,397	3,654	1,511	1,618	281	13,993
H29年	286	1,729	1,582	3,964	3,981	1,268	1,024	221	14,055
H28年	325	1,220	1,657	3,424	3,267	1,221	740	205	12,059

自然保護センターには自然公園管理員が配置(通年2名、夏季3名)されており、展示の解説・案内、自然観察会、自然情報の発信、施設の清掃・管理等の他、パークボランティアと協力して巡回、草刈り、電気柵管理等を実施している。

自然保護センターにおけるエコツーリズム推進上の問題点、課題として下記が挙げられる。

■自然保護センターの問題点、課題

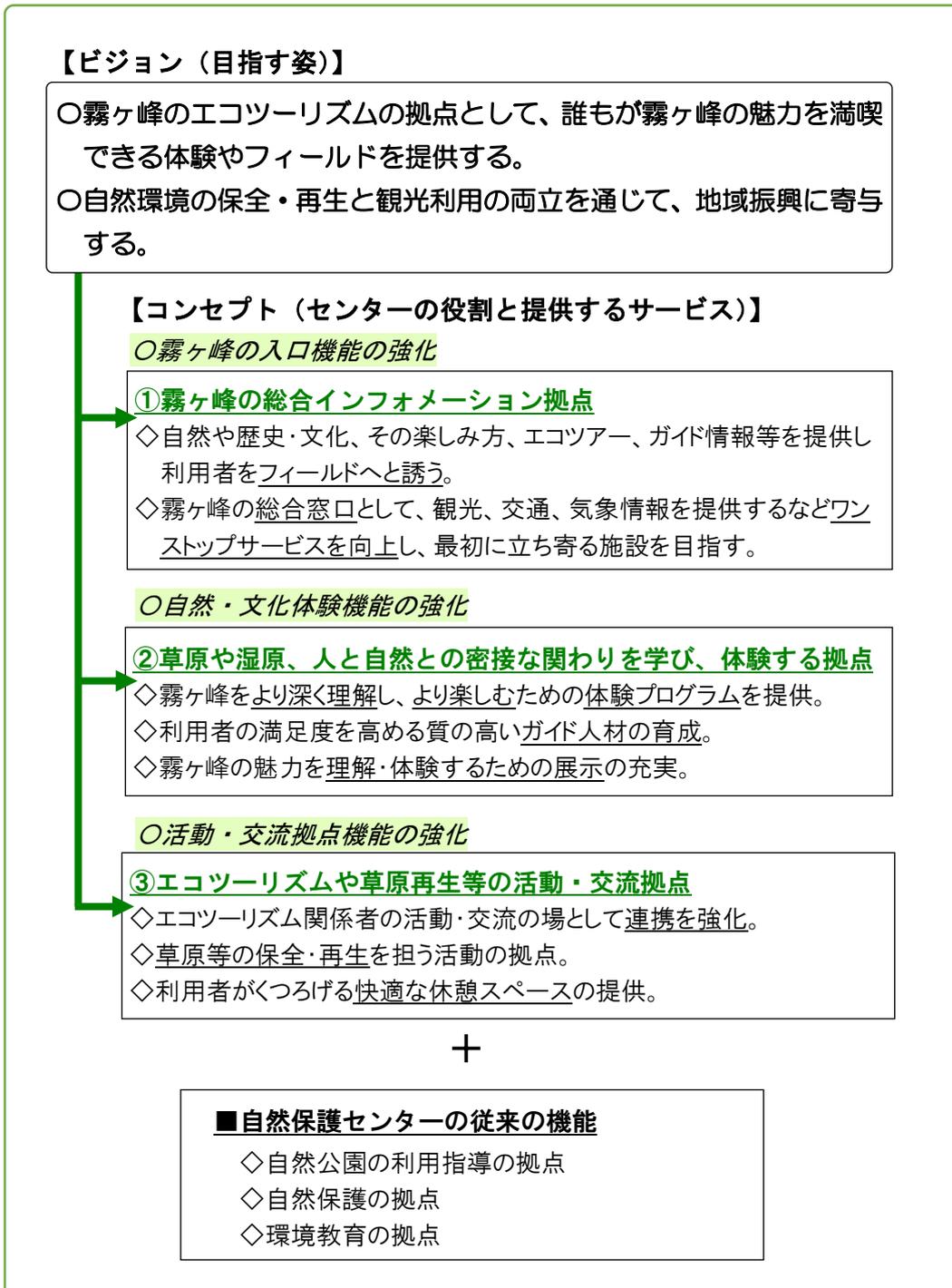
- *地域全体の観光客に対して、センターへ立ち寄る観光客の割合は低い。(認知度が低い、場所が分かりにくい)
- *展示の評価は高いが、老朽化しており、最新の知見等が反映されていない。また、多言語に対応していない。
- *無料のガイドツアー(保険料のみ負担)を実施しているが、限られた人員では、利用者に十分な機会を提供出来ていない。また、有料・長時間プログラムも実施出来ていない。
- *霧ヶ峰についての総合的な情報提供が求められているが対応できていない。

第3章 霧ヶ峰自然保護センターのビジョン及びコンセプト

1 ビジョン及びコンセプト

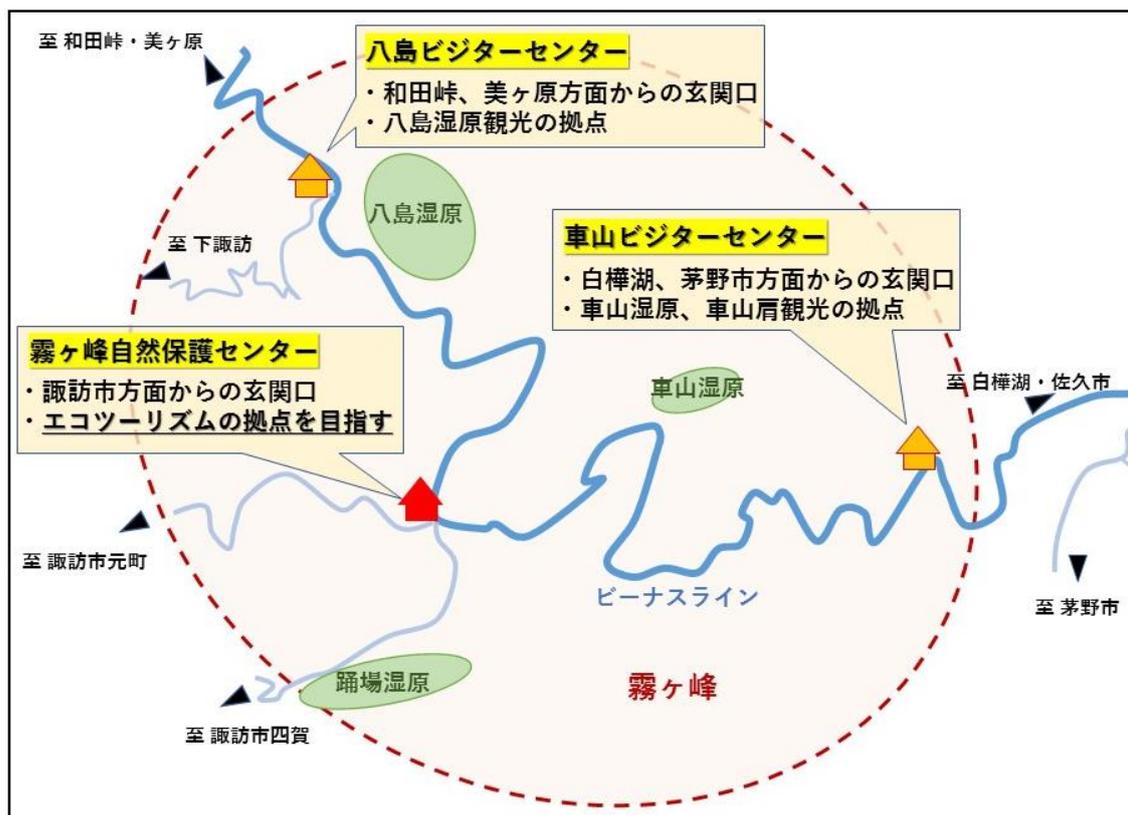
前章で示した霧ヶ峰の観光やエコツーリズムの現状、強みや課題等を踏まえた、霧ヶ峰自然保護センターのビジョン（目指す姿）とコンセプト（センターの役割と提供するサービス）は次の通りとする。

当該ビジョン及びコンセプトを踏まえて、自然保護センターの従来機能に加え、エコツーリズムの拠点としての機能強化を図る。



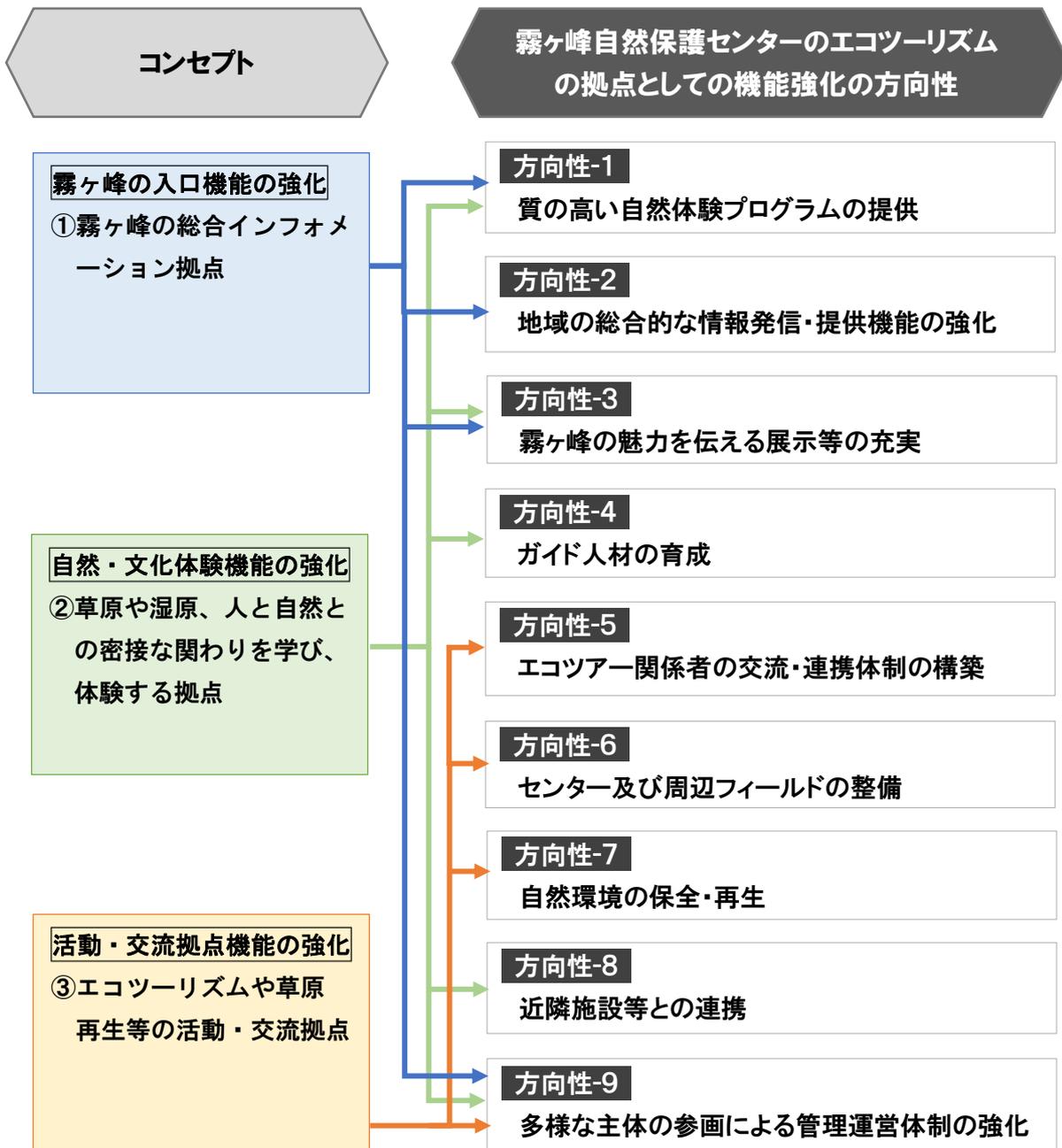
2 近隣ビジターセンターとの連携

霧ヶ峰では、霧ヶ峰自然保護センター、八島ビジターセンター、車山ビジターセンターのそれぞれが霧ヶ峰の入口に位置していることから、3施設が連携して霧ヶ峰の自然やエコツーリズムに関する情報提供の強化を図る。さらに、霧ヶ峰自然保護センターは霧ヶ峰のエコツーリズムの拠点としての役割を担うことを目指す。



第4章 霧ヶ峰自然保護センターの機能強化方針

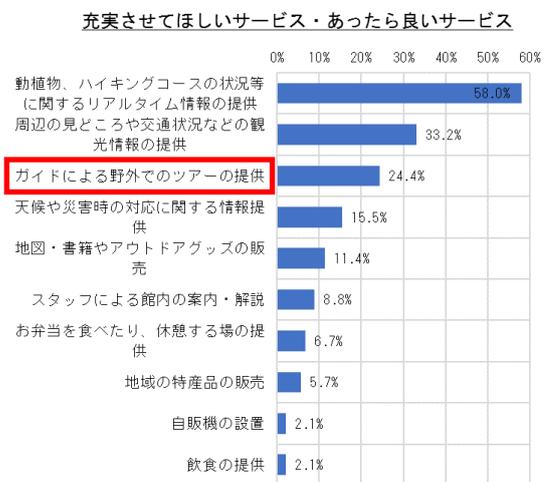
前章で示したビジョン及びコンセプトに基づき霧ヶ峰自然保護センターのエコツーリズムの拠点としての機能強化方針を定めた。



方向性-1 質の高い自然体験プログラムの提供

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰自然保護センターでは、土日祝日及び7～8月の毎日（休館日除く）、センター周辺でのガイドウォークを実施している。当該ツアーは、短時間、低コスト（保険料のみ負担）で気軽に霧ヶ峰の自然に出会えるツアーであり、参加者の評価も高い（ガイドツアー参加者アンケート参照）。
- ・一方、センター職員の人員体制が限られている中で、霧ヶ峰の自然を深く体験するような有料の質の高いプログラムは提供できていない状況にある。
- ・自然保護センター来訪者へのアンケートでは、「充実させて欲しいサービス・あったら良いサービス」として、「ガイドによる野外でのツアーの提供」が多く挙げられている。また、自然保護センターのガイドウォーク参加者へのアンケートでは、今後参加してみたいエコツアーとして、ナイトツアー、野鳥観察等が多く挙げられている。
- ・霧ヶ峰地域においては、エコツーリズムに関する一元的な情報発信・受入態勢がなく、霧ヶ峰のエコツーリズムの楽しみ方が十分に認識されていないと考えられる。また、来訪した当日に参加できるガイドツアーが提供できていない。



出典：霧ヶ峰自然保護センター利用者アンケート

【機能強化方針】

○霧ヶ峰のエコツーリズムの拠点として、民間ガイド事業者と連携し、自然保護センターを活用した多彩なプログラム展開する。

【具体的取組】

①民間ツアーデスクの設置（県、民間事業者）

- ・自然保護センター内にエコツアー事業者や観光協会等によるツアーデスク（ツアーを手配する窓口）を設置し、エコツアーの窓口機能及びアクティビティ情報発信機能を強化する。
- ・ツアーデスクスタッフとセンタースタッフの連携により、プログラム充実と館内サービス向上等との相乗効果を発揮することを目指す。



霧ヶ峰自然保護センターのカウンター



ツアーデスク設置例（川湯エコアドベンチャーセンター）
（出典）自然公園財団 HP

< ツアーデスクの業務内容（案） >

- ・ ツアーデスクによる業務内容は、下表の収益事業を基本とする。また、現在のセンター業務（非収益）のうち、ツアーデスク業務に関連が深い業務については、センター職員と連携して実施することを想定する。
- ・ 下表の業務内容例は現段階での想定であり、事業スキーム・業務内容案については今後、民間事業者との対話等を通じて詳細を設定する。

■自然保護センターの業務内容及びツアーデスクの業務内容（案）

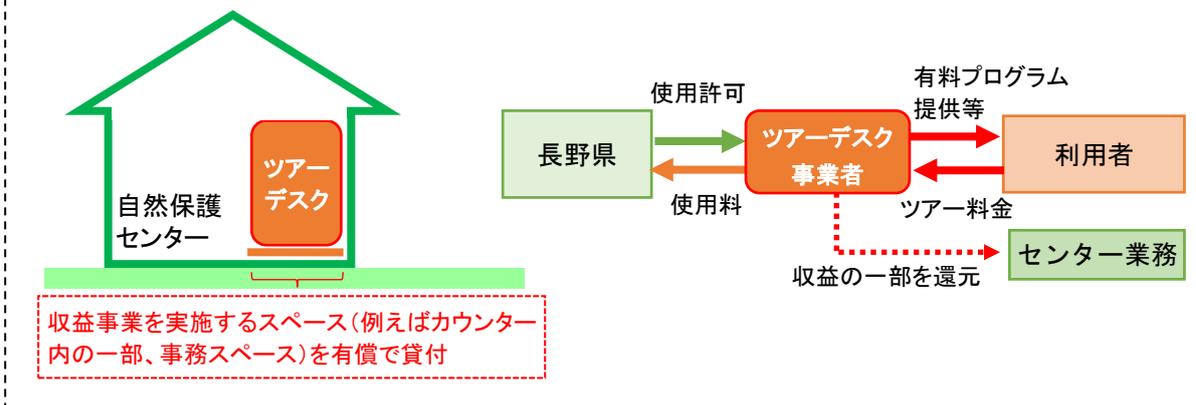
自然保護センターの業務内容		ツアーデスクの業務内容(案)
公園管理業務	霧ヶ峰自然研究路の管理	有料プログラムの提供
	冬季湿原の管理、シカ柵管理	物販（霧ヶ峰関連グッズ、書籍、登山用品等）※ ¹
	忌避剤散布試験区管理	旅行商品の販売※ ²
	マナー啓発、注意喚起、自然環境の把握	
運営業務	カウンターでの来訪者対応、情報提供	
	自然に関する問合せ対応	
	観光に関する問合せ対応	
	HP 管理、更新による情報発信(センターHP、霧ヶ峰 一列)	
	備品管理、センター物品管理、落とし物管理	
	展示作成	
	センター維持管理（清掃等）	
プログラム	無料プログラムの提供、出前講座	
	館内案内（団体プログラム含む）	
	職業体験プログラム、インターンシップ	
調査	ニホンジカライトセンサス調査	
	レンゲツツジ調査	
その他	霧ヶ峰ビジターセンター連絡会関係	ツアーデスクが担う事業(収益事業)
	パークボランティア活動の補助	ツアーデスクと関連が深い業務
	地元イベントへの参加	

※¹： 周囲の土産物店等と競合することが無いよう品目は要検討。

※²： 宿泊・運輸を含む旅行商品を販売する場合は旅行業登録が必要。

<事業スキーム（イメージ）：県有財産の使用許可により事業を実施するケース>

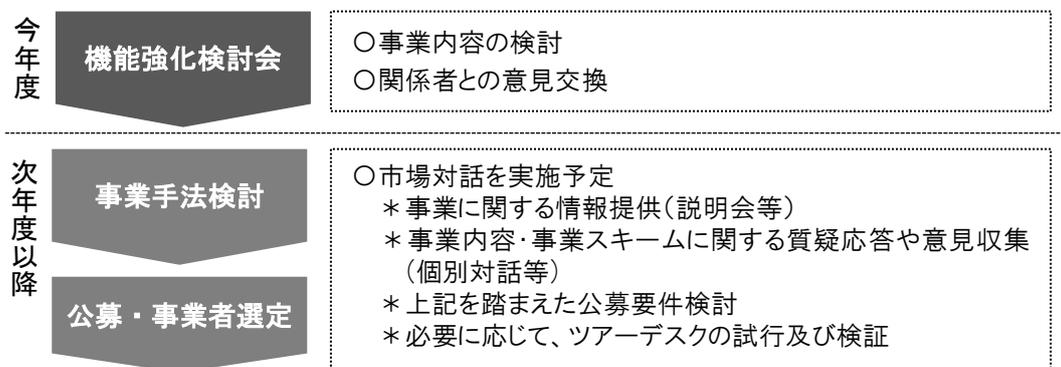
- 民間事業者が自然保護センター（長野県有施設）の一部で、県有財産等の使用許可を得て収益事業（有料プログラムの提供等）を実施。
- 収益の一部をセンターの管理運営へと還元する仕組みを検討する。例えば、ツアーデスクと関連の深い業務については、民間事業者とセンター職員とが連携して実施することを想定（業務内容・条件等については民間事業者との対話等を通じて設定）。



<今後の検討の流れ>

- ・事業計画段階からツアーデスク運営に携わる可能性が有る事業者の意向等を把握することにより、運用しやすい事業スキームの構築を図る。その際、公平性・透明性の確保に留意し、対話型サウンディング調査等の実施等を予定する。
 - ・ツアーデスクの業務内容や運営期間（例えば、冬期の運営の可否等）については、民間活力を積極的に活用する観点から、市場対話や試行等を踏まえて柔軟に検討する。
- ※次年度以降、官民連携による自然保護センターの管理運営体制の具体的なあり方を検討する予定であるが、検討を進める中で指定管理者制度を導入することとなった場合には、ツアーデスク業務は指定管理者が担うことも検討する。（方向性9参照）

■今後の検討スケジュール(案)

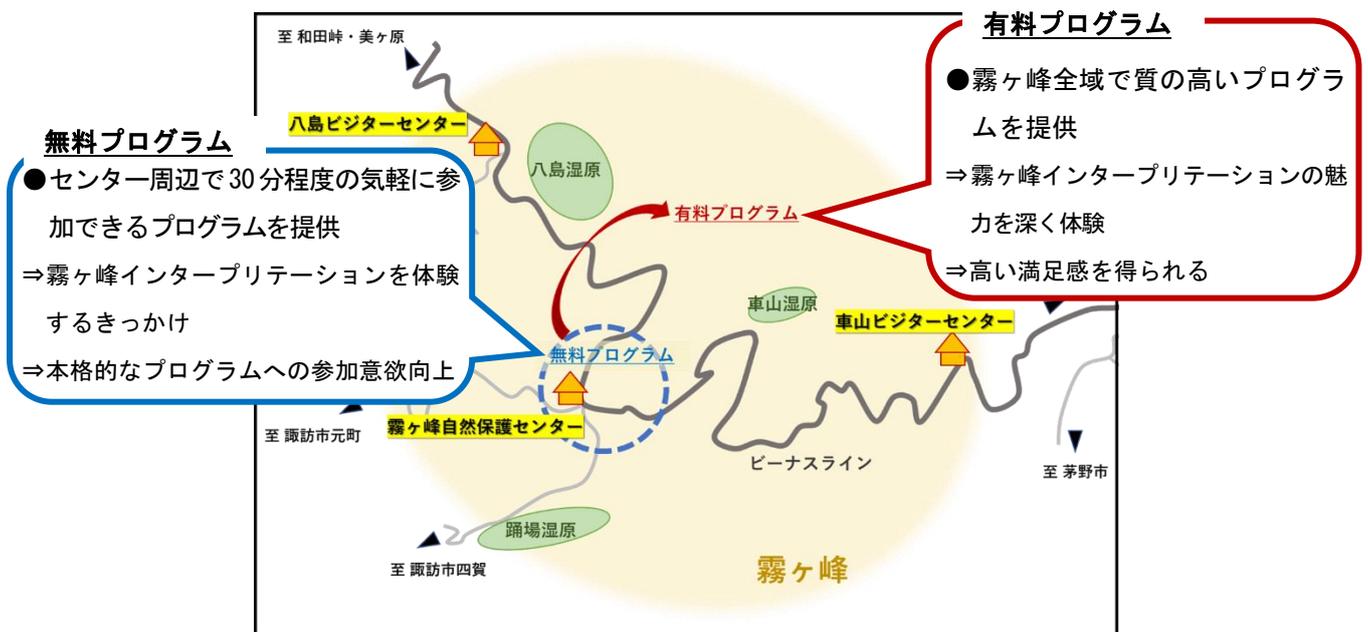


②有料・無料プログラムの整理：無料プログラムの見直し（県、センター、民間事業者）

- ・自然保護センターにおける自然体験プログラムについては、「気軽に参加したい」、「より質の高いプログラムに参加したい」といった双方のニーズに対応するため無料プログラム及び有料プログラムを提供する。
- ・無料プログラムは、誰もが利用できるという公共施設としての役割を果たすため自然保護センター職員が実施する。
- ・有料プログラムは、準備・内容が高コストになる質の高いプログラムであるため受益者に相応の負担を求めて実施する。当該プログラムは民間ガイド事業者等が自然保護センター等も活用して実施する。
- ・現在、自然保護センターが提供している無料プログラム（センター周辺において1時間程度実施）と民間事業者が実施している有料プログラムとの区分の明確化を図るため、無料プログラムについては、場所と時間を限定して実施する。無料プログラムの場所はセンター周辺（自然研究路、霧鐘塔等）とし、時間については30分程度のツアーを1日2回開催とすることで、多くの利用者が気軽に参加しやすい機会をつくとともに、霧ヶ峰インタープリテーションの紹介を通じて、有料プログラムに参加するきっかけを提供する。

■霧ヶ峰における無料プログラムと有料プログラムの比較

	基本的事項	効果	霧ヶ峰での展開
無料プログラム (保険料は利用者負担)	<ul style="list-style-type: none"> ・短時間で誰もが気軽に参加できるプログラム ・参加者のコスト負担の低減 	<ul style="list-style-type: none"> ・霧ヶ峰の自然と出会うきっかけを得る。 ・霧ヶ峰インタープリテーションを紹介し、より本格的なプログラムへの参加意欲が向上する。 	<ul style="list-style-type: none"> 【フィールド】 ・自然保護センター周辺 【時間】 ・30分程度（霧ヶ峰インタープリテーションの導入）
有料プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・質の高いプログラム ・準備・内容などが高コストになることから受益者負担 ・テーマ・ターゲットを明確化し、より深く霧ヶ峰を体験するプログラム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・霧ヶ峰インタープリテーションの魅力により深く体験することが出来る。 ・より高い満足感を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 【フィールド】 ・霧ヶ峰エリア全域 【時間】 ・1時間程度～宿泊を伴うプログラムまで、内容やニーズに応じて設定



霧ヶ峰における無料/有料プログラムのフィールド

<事例：田貫湖ふれあい自然塾における自然体験プログラム（有料及び無料）の提供>

- ・富士箱根伊豆国立公園の田貫湖ふれあい自然塾は、「自然ふれあい機能」を重視したビジターセンターとして環境省が整備。2000年7月開設。
- ・管理運営主体は、田貫湖ふれあい自然塾運営協議会（環境省、静岡県、富士宮市、(財)休暇村協会、(社)日本環境教育フォーラムで構成）。
- ・田貫湖ふれあい自然塾では、ファン層の拡大を目的に短時間で気軽に参加できる「無料プログラム」と、より高品質で受益者に負担を求める「有料プログラム」を提供している。
- ・プログラムには、日替わりプログラム（毎日の午前と午後の2回定時に開催。予約なしで参加できるプログラムが多い）、特別プログラム（特定の日に開催）、団体・研修プログラム（学校や企業向け）がある。

（日替わりプログラムの例）

○無料プログラム

館内・森と洞くつ探検（30分）：自然塾内の青木ヶ原と溶岩洞くつのジオラマをヘルメットとライトを持って、ガイドと一緒に探検。

季節の自然さんぽ（30分）：四季折々の風景やその季節にしか見られない花や鳥等について、見ていただけではわからない、生きものの暮らしの工夫や知恵等の面白さをガイド。

○有料プログラム

富士山自然スライドショー&ネイチャーガイド（120分、1,050円）：富士山の不思議や恵み、歴史や自然について、スライドショーや実験、湖畔の散策等を通じて案内・解説。

丸太切りジグソーパズル作り（60分、500円）：間伐材を輪切りにし、好きな絵を描いて割ってパズルをつくる。楽しみながら林業のこと、木の性質について学ぶ。

（特別、団体・研修プログラム例）

火山洞窟体験（3時間、学校利用2,160円）：富士山周辺の火山洞窟において、火山洞窟の成り立ちを体験的に学ぶとともに、鎌倉時代以降の史跡・伝統と洞窟の関わり、富士講等に触れながら、自然と人との関わり方を学習する。

（参考：環境省「自然公園のあり方懇談会資料」、田貫湖ふれあい自然塾HP）

③霧ヶ峰の多彩な魅力を活かしたプログラム造成支援（県・センター、環境保全研究所）

- ・現在、霧ヶ峰で実施されているエコツアーは、湿原・草原でのガイドウォークやナイトウォーク等、自然を対象としたツアーが大半である。一方、霧ヶ峰のエコツーリズムの資源・魅力は、歴史・文化や人と自然との関わりなど多岐にわたる。
- ・これまで、「霧ヶ峰再生のための基本計画」等において、霧ヶ峰の魅力を体験するためのプログラム等が検討されているが、実際に提供されているツアーは限られている。そこで、これまでエコツアーの素材として未活用の資源や時期に着目し、プログラム造成を支援することにより、霧ヶ峰の多彩な魅力を活かしたプログラム展開を図る。（下表に今後活用が期待されるテーマ・素材を示す）
- ・その際、マーケットインの観点から利用者ニーズを踏まえ、ターゲットを明確にした検討を行うとともに、地域の取組や周辺の宿泊施設等と連携を図るなど、地域経済への寄与にも留意したプログラムを検討する。
- ・また、環境保全研究所との連携により、霧ヶ峰の自然の価値を掘り起こすとともに、その価値を見える化し、分かりやすく整理・発信することで、プログラムの造成を支援し、持続的な活用を図る。
- ・あわせて、自然保護センターを拠点としたプログラム造成を図ることで、例えば自然保護センターをツアーの起終点とし、プログラムの導入や振り返りの場として展示を活用するなど、効果的な学びや体験を促す。
- ・なお、現状の霧ヶ峰インタープリテーションは、ツアーのテーマや素材を絞らずに実施することで、霧ヶ峰の非日常的な空間に基づく安らぎ、安心、共感等を重視したプログラムを展開しており、そのような“霧ヶ峰らしさ”に留意したプログラムの内容充実に資する支援を行う。（プログラム造成支援の枠組みについては、方向性4「人材育成」に記述。）

■霧ヶ峰において想定される有料エコツアーのテーマ例

分野等	テーマ・素材
草原・湿原・樹叢	<ul style="list-style-type: none"> ○生物多様性ホットスポットとしての霧ヶ峰の価値 ○草原景観等の保全活動（火入れ、雑木処理、外来種駆除、シカ柵、ライトセンサス等の体験・学習） ○バードウォッチング
歴史・文化、 人と自然との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ○草原景観と歴史との関わり （黒曜石、縄文遺跡、諏訪大社の鹿食免） ○諏訪と霧ヶ峰との関わり （採草と里の暮らし、水源と諏訪の酒） ○歴史 （鎌倉武士と諏訪神社、中山道・和田峠）
その他	○自然保護センター館内インタープリテーション

* 検討委員意見や利用者アンケート、「霧ヶ峰再生のための基本計画」で提唱されたプログラム案と現在のプログラム実施状況等を踏まえて作成。

【現状と課題】

- ・自然保護センターには施設利用者や電話での問い合わせが多く寄せられている。内容については自然に関するものに加えて、観光や宿泊に関するものも多い。
- ・自然保護センター来訪者へのアンケートでは、「充実させて欲しいサービス・あったら良いサービス」として、「動植物、ハイキングコースの状況等に関するリアルタイム情報の提供」「周辺の見どころや交通状況などの観光情報の提供」が最も多く挙げられており、次いで「周辺の見どころや交通状況などの観光情報の提供」が多く挙げられている。ワンストップサービス向上の観点からは、自然だけではなく霧ヶ峰に関する総合的な情報提供が求められている。
- ・また、自然保護センター来訪者アンケートによると、霧ヶ峰来訪前から自然保護センターの存在を知っていた来訪者は3割に満たなかったことから、自然保護センター自体を周知するための情報提供も必要である。

充実させてほしいサービス・あったら良いサービス



出典：霧ヶ峰自然保護センター利用者アンケート

【機能強化方針】

〇ワンストップサービスの窓口機能を強化するため、自然情報のみならず周辺の観光施設・交通等の情報を、観光協会や民間ツアーデスク等と連携して提供する。

【具体的取組】

①民間事業者との連携による観光情報等の提供（県・センター、ツアーデスク、観光協会）

- ・自然保護センターについて、霧ヶ峰の総合窓口としての機能を強化するため自然情報に加えて観光情報の提供を図る。
- ・対人及び電話等での問い合わせについては、自然保護センターに導入予定の民間ツアーデスクと連携して対応するとともに、観光情報の収集についても民間ツアーデスク及び観光協会と連携して対応を図る。
- ・また、諏訪観光協会では、インターネットによる観光情報の発信強化を図っていることから、自然保護センターにおいてもインターネットによる自然情報の発信を強化し、相互にリンク・連携することで、それぞれの強みを活かした情報提供を行う。

②利用ステージに応じた情報提供(県・センター、ツアーデスク、観光協会、ガイド事業者)

- ・霧ヶ峰に関する情報提供・発信について、旅前・旅中・旅後といった利用ステージ毎に、効果

的な取組を行う。リアルタイムの情報発信に際しては、現状の自然保護センターの運営体制での情報の収集や発信には限界があるため、観光協会、ツアーデスク等と連携した情報発信、ガイド事業者との協働による自然情報の収集・蓄積、観光利用者による情報発信等、様々な主体と連携・協働した情報収集・発信に留意する。

■利用ステージ毎の情報提供・発信の方向性

利用ステージ	情報提供・発信に関する取組（案）
旅 前	<p>★まず、霧ヶ峰の魅力を知ってもらう。（「霧ヶ峰に行きたい」と思ってもらう。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・霧ヶ峰ポータルサイト等を活用した一元的な情報発信及び SNS 等を活用したリアルタイムの開花情報、気象情報等の情報発信。 ・霧ヶ峰の多彩な特徴を、分かりやすく・魅力的に伝え、利用者の目的・ニーズに応じた行程検討・ルート選択等を支援。 ・その際、霧ヶ峰に着いたら「まず、センターに行ってみよう」と思われる情報提供に留意。
旅 中	<p>★霧ヶ峰の魅力をストレスなく満喫できるよう、現地での行動をサポートする情報を発信する。</p>
アクセス ルート	<ul style="list-style-type: none"> ・公共交通機関の駅や山麓の観光案内所等において、霧ヶ峰自然保護センター及びそこでのエコツアーの取組を周知。
自然保護 センター 周辺	<ul style="list-style-type: none"> ・自然保護センターへの誘導機能の確保。 ・歩道起点や見どころポイントにおける案内・解説機能の充実により、歩道沿線の魅力を分かりやすく提示。
自然保護 センター	<ul style="list-style-type: none"> ・入口付近において、「霧ヶ峰の楽しみ方」の情報を発信。来訪者が目的や行程(時間)に応じて霧ヶ峰の魅力を堪能できるよう、ちょっとした散策～歩きごたえのあるコースまで様々な楽しみ方を提案する。 ・霧ヶ峰の自然や利用に関するリアルタイム情報（見どころ、歩道状況等）の集約と発信。 ・Free Wi-Fi の導入等により、利用者が SNS 等で霧ヶ峰の魅力を発信しやすい環境を整備。（観光客による情報発信については、盗掘等防止のため希少種情報の取扱いに関する啓発が必要）
旅 後	<p>★利用者の口コミによる情報発信を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者が帰った後に、霧ヶ峰の魅力を周囲に伝えたり、SNS でシェアしたりするなど、口コミで PR してもらうための仕組みづくり。 ・別の季節の魅力を発信（リピータになってもらう工夫）。

■自然保護センターを中心としたリアルタイムの情報発信に関する具体的な取組（案）

取組（案）	情報発信主体	センター・ツアーデスク	ガイド事業者	観光協会
SNS等で、旬の見どころや利用情報を発信				
*気象情報、開花情報を毎日発信 （気象サイトとのリンクや当日の花の写真掲載）		◎		
*ガイドツアーの内容について写真とあわせて発信		◎	◎	
*渋滞状況や駐車場の混雑状況の発信 （ピーク期は毎日発信）		◎		○
*問合せの多い内容について、HP、SNS等で定期的に発信・回答（観光協会と相互リンク等）		◎		○
センター入口掲示板等で、自然・歩道等の情報を提供 （ガイドツアー中に確認した情報をセンターに集約）		◎	◎	
利用者がSNSで感想等を発信する際、ハッシュタグの活用やセンターが発信する情報等をリンクしてもらう		◎	○	

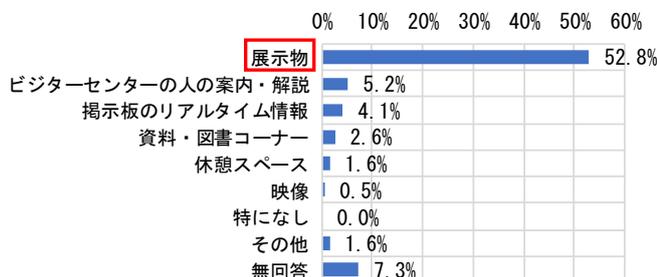
◎取組主体、○関係主体

方向性-3 霧ヶ峰の魅力を伝える展示等の充実

【現状と課題】

- 霧ヶ峰自然保護センターの既存の常設展示については、老朽化しているものの、霧ヶ峰の自然等を分かりやすく解説する内容となっており、利用者アンケートによると、自然保護センターで良かったこととして、展示が最も多く挙げられている。

センターのよかったところ (N=193)



出典:霧ヶ峰自然保護センター利用者アンケート

- ただし、既存の常設展示については、近年の植生の遷移や草原の保全・再生活動、最近の研究成果等に関する情報は十分ではない。
- 学校・団体利用については、主に映像・研修室を利用している。特に悪天時の利用に関するニーズが高い。
- 展示の多言語対応はされていない。

【機能強化方針】

○霧ヶ峰のエコツーリズムの特徴である、草原、湿原、樹叢が織りなす多彩な景観や自然環境、人と自然との関わり等を知り、深く感じ、体験するため、フィールドに誘い、フィールドでの感動を引き出すための展示を行う。

【具体的取組】

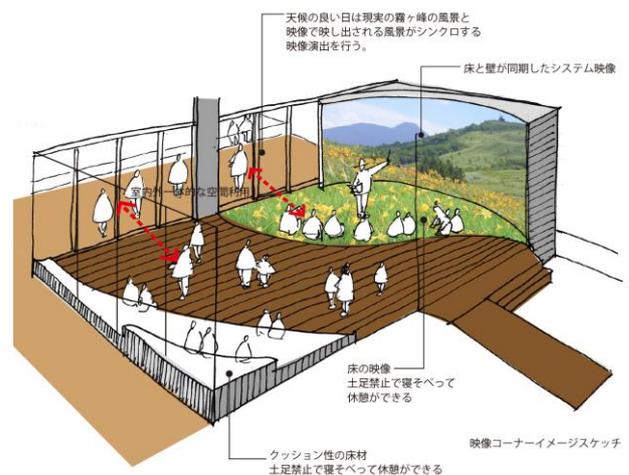
① 最新の知見等を反映可能な展示フレームの改修（県）

- 既存の常設展示の内容を活かしつつ、情報の更新が可能となるよう壁面・展示フレームを改修し、可変自由の展示構成とする。
- 展示内容については、最新の研究成果（生物多様性のホットスポットとしての重要性や草原景観と歴史との関わり等）や草原の保全・再生活動（シカ柵、火入れ、外来種駆除等）の解説を追加する。特に風景の背景理解と未来継承を促す内容に留意し、草原景観を通して、人と自然との関わり合いを学ぶ展示を検討する。



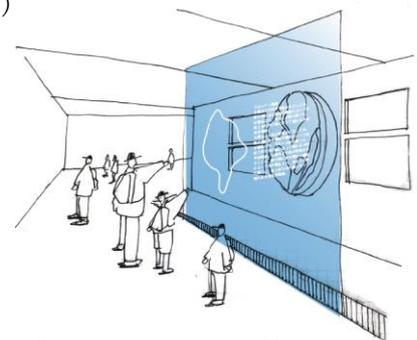
② 悪天候でも霧ヶ峰を楽しめる映像展示の充実（県）

- ・映像・研修室を改修し、霧ヶ峰の臨場感のある映像をくつろぎながら楽しむスペースを創出することで、「また来たい」「次は別の時期に来たい」と思ってもらえる映像演出を図る。
- ・天候の良い日は現実の風景と映像で映し出される風景がシンクロする映像演出を行うなど、室内外一体的な空間利用を図る。
- ・供用に際しては、現状で研修室の利用が多い学校団体の利用と、個人の休憩・映像観賞等の利用との共存を図る運用方法について検討を行う。



③ 利用者をフィールドへと誘うリアルタイムの情報発信（県）

- ・現在、自然保護センターでは入口付近の掲示板において、開花や気象に関する最新の情報を提供している。これらに加えて、来訪者が目的や行程（時間）に応じて霧ヶ峰の魅力を堪能できるよう、ちょっとした散策～歩きごたえのあるコースまで様々な旬の楽しみ方を提示することで、フィールドへと誘う展示を行う。
- ・そのため、既設のインフォメーションボードの整理・編集を行い、強化ガラス板に集約したかたちで設置する。
- ・常に新しい情報が得られ、リピーターやパークボランティアがみても飽きのこない情報・展示に留意する。



④ 展示等の多言語化によるインバウンド対応強化（県、環境保全研究所）

- ・多言語対応は日本語と英語を基本とする。展示スペースには限りがあることから、多言語での情報提供の手段としては常設の展示パネルのみでなく、パンフレット等の紙媒体や ICT 技術を活用し、更新が容易なかたちで情報提供について検討を行う。

⑤ 簡易補修、故障対応の負担軽減（県）

- ・ジオラマ等の老朽化した展示については簡易の補修を図る。ジオラマ内部の配線については、職員による故障対応の負担が大きいため、配線整理を行う。

※施設整備・改修の具体的内容については、方向性 9 に記載の「霧ヶ峰自然保護センター連絡会議（仮称）」の場を活用するなど、地元市町村や関係者と引き続き協議し、決定する。

⇒詳細な施設イメージについては、p. 37以降のイメージスケッチ参照

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰ビジターセンター連絡会では霧ヶ峰インタープリター養成講座を開催している。養成講座終了後は、研修やガイドのアシスタントを経て、霧ヶ峰インタープリターとして活動することが出来る。養成講座の講師等は、霧ヶ峰ビジターセンター連絡会及び霧ヶ峰自然教室が務めている。
- ・現在、インタープリターは20名、養成講座の修了生は149名となっている。
- ・養成講座の修了生がインタープリターになって活躍する割合が低いことが課題である。これは養成講座修了後のアシスタントの機会等を安定的に提供することができないことや、研修・アシスタントの過程で意欲や自信を失う方がいること等が要因として考えられる。また、インタープリターが少ないため、団体受入れ時はインタープリター側が不足する事態も生じている。

【機能強化方針】

○霧ヶ峰のエコリズムを担うガイドの質・量を担保するため、現在行われている霧ヶ峰インタープリター養成の取組と連携して、ガイド人材育成及び魅力的なプログラム開発を図る。

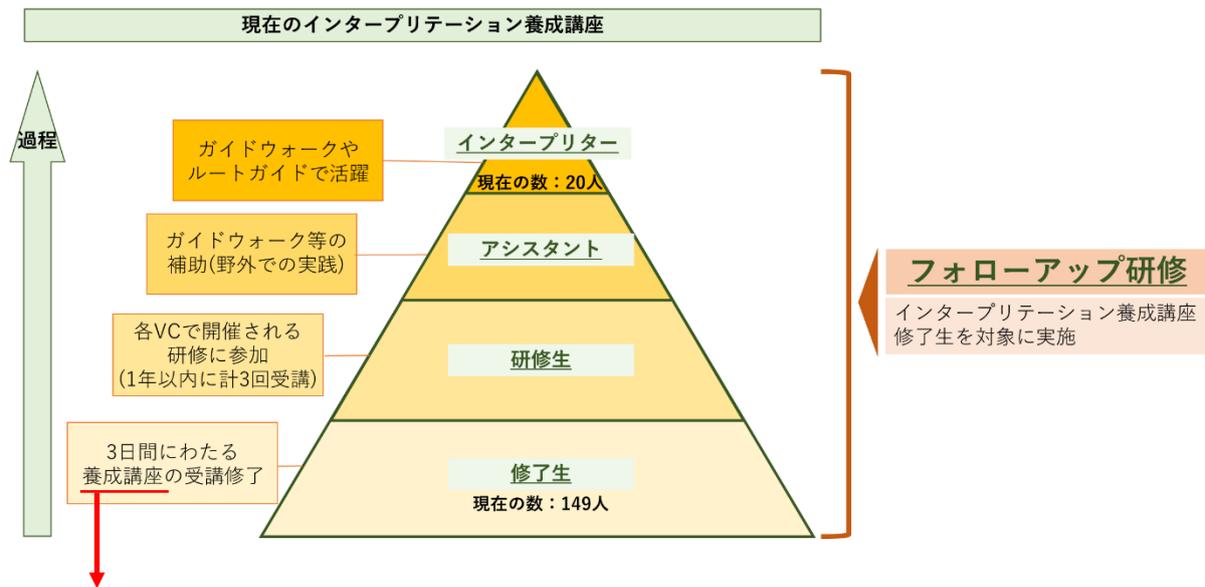
【具体的取組】

①霧ヶ峰インタープリター養成制度と連携したガイド研修の実施（県・センター、環境保全研究所）

- ・霧ヶ峰ビジターセンター連絡会による霧ヶ峰インタープリター養成制度と連携したガイド人材の育成を行う。
- ・霧ヶ峰インタープリター養成講座の修了生が、インタープリターとして活躍する割合が低い現状を踏まえ、修了生等に対してスキルアップの機会を提供するとともに、ピーク期以外の霧ヶ峰の魅力を活かした新たなプログラム開発に資する「フォローアップ研修」を実施する。

■霧ヶ峰インタープリター フォローアップ研修

- 霧ヶ峰インタープリター養成講座修了生に対してスキルアップの機会を提供するための研修（1泊2日程度）。
- 研修内容は下記を想定。
 - *霧ヶ峰の自然・文化に関する最新の知見
 - *事業運営（事業の持続的運営に関するノウハウ、広報、旅行商品造成・販売等）
 - *新たなプログラムの開発
 - ・ピーク期以外の時期のプログラム（ガイドの通年雇用に資するプログラム開発）
 - ・霧ヶ峰の多彩な魅力を伝えるプログラム（自然のみではなく、歴史・文化や人と自然との関わりについて学び・体験できるプログラム等）
 - ・山麓と連携したプログラム
 - *インバウンド対応（外国人向けガイドのノウハウ）



【現在のインタープリター養成講座の内容】

1 日目	屋内講義	「霧ヶ峰インタープリテーションが出来た理由、なぜ必要か？」
	屋外実習	「プログラム作成と発表①」 ⇒ 「解説する」ことを体験。各自素材を選びプログラムを組み立て、発表
2 日目	屋内講義	「霧ヶ峰インタープリテーションとは？」
	屋外実習	「霧ヶ峰インタープリテーションの体験」 ⇒ 実際に、インタープリテーションを体験 「プログラム作成と発表②」 ⇒ 講義で学んだことを意識してプログラムを組み立て、発表
3 日目	屋外実習	「霧ヶ峰を知る」：八島湿原を歩き、霧ヶ峰の自然に触れる
		「3日間の振り返り」：全員で振り返り、3日間をまとめる。
		「救命救急講習」：心肺蘇生法と AED の使い方
		閉講式：全体講評、修了書授与

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰では、「霧ヶ峰インタープリテーション指針」の考え方に基づいたガイドが20人程活動している。ガイドの連携組織等はなく、ビジターセンター連絡会を中心に緩やかなつながりで活動している。ガイド依頼があった場合は、各ビジターセンターや霧ヶ峰自然教室等がガイドの手配・調整を行っている。
- ・霧ヶ峰では、霧ヶ峰自然保護センターや車山ビジターセンター、霧ヶ峰自然教室等がガイドツアーを実施している。一方、霧ヶ峰のエコツアーについて、どこで、どんなプログラムが行われているか、といった情報は整理されておらず、ポータルサイト等においても、霧ヶ峰のエコツアーに関する一元的な情報発信は出来ていない状況にある。

【機能強化方針】

○霧ヶ峰自然保護センターを拠点として、エコツーリズムに携わる関係者の交流・連携体制を強化する。

【具体的取組】

①エコツアー関係者の連絡・調整の場の確保（県・センター、VC連絡会、ガイド事業者）

- ・霧ヶ峰のエコツーリズムに関する情報共有や意見交換等を目的として、ガイド等のエコツアー関係者が定期的集まり連絡・調整を図る場を自然保護センター（ビジターセンター連絡会）が幹事役となって確保する。
- ・情報共有・意見交換等を想定する項目は以下の通り。
 - *エコツアーの実施状況（プログラム、テーマ、フィールド、料金、時間、参加者数等）に関する情報収集・共有。
 - *霧ヶ峰におけるエコツーリズム関連の取組等に関する連絡調整。
 - *エコツアーの素材である自然・文化資源等の状況（ツアー実施時に気づいた変化等に関する情報共有）。
 - *資源保全上の問題が発生した場合は、対応に関する意見交換。必要に応じて自主ルール等の設定。
 - *ガイドスキル向上のための自主研修の実施
- ・あわせて、定期的な会合とは別に、開花状況等のリアルタイムの見どころ情報を自然保護センターに提供してもらうよう呼びかけ、利用者への情報提供へ活用する。
- ・将来的にガイドの組織化が必要と判断された場合には、当該会合を基礎として、ガイド連絡協議会（仮称）の設立を検討する。

②霧ヶ峰のエコツアー一覧の共同作成（県・センター、VC連絡会、ガイド事業者）

- ・上記①の場等を活用して、霧ヶ峰のエコツアーの実施状況に関する情報収集を図り、霧ヶ峰のエコツアーを網羅したリストを作成する。
- ・当該リストについては、霧ヶ峰ポータルサイトに掲載するとともに、各ビジターセンターでの情報提供に活用する。また、観光協会や宿泊施設に提供することで、エコツアーの集客や地域での滞在時間の延長を図る。

【現状と課題】

(自然保護センター周辺)

- ・自然保護センターは、エコツーリズムの拠点として、霧ヶ峰に来訪した利用者が最初に立ち寄ることが期待される。しかし、現状では道路や駐車場等から視認しづらかったり、何の建物かが分かりにくいいため、その存在に気が付かれない場合が多いと考えらる。

(自然研究路等のフィールド)

- ・センター周辺には自然研究路や霧の小みち等、気軽に散策を楽しめる歩道が多く存在し、センターが提供する無料プログラムの主要なフィールドとなっている。一方、駐車場等における案内や歩道起点までの誘導が不十分な状況であり、歩道の存在に気が付かない利用者も多いと考えられ、フィールドと直結した利用拠点としての強みが十分には発揮されていない。
- ・自然研究路については、シカ食害により観察できる植物が減少するなど魅力性が低下している。



南側駐車場から見た自然保護センター(右奥)

(休憩場所)

- ・霧ヶ峰の草原景観は、主に車窓や歩道からの眺望利用が多く、ゆったりと座って快適に草原の景観を楽しむ場所は少ない。
- ・自然保護センターでは、現状で映像・研修室が休憩利用に供されており、そこからは草原への眺望も得られることから、より居心地の良い空間を創出することで、休憩・交流機能を強化することが期待される。



センターから草原方面への眺望

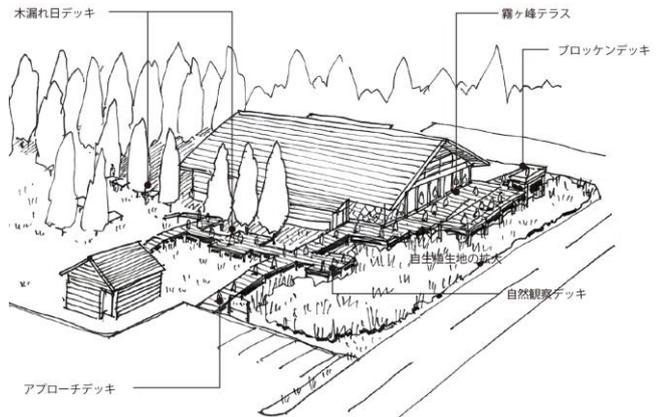
【機能強化方針】

- 霧ヶ峰の玄関口としてエントランス性を強化するとともに、フィールドと一体的な利用拠点として、周辺の園地・歩道の整備を図る。
- 草原への眺望を活かし、快適な休憩・交流スペースを創出する。

【具体的取組】

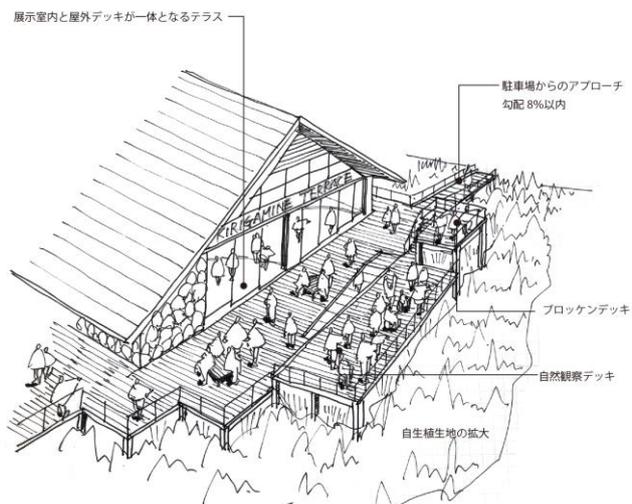
①アプローチデッキ等の設置によるエントランス性の強化 (県)

- ・隣接する駐車場から自然保護センターへと誘導するため、デッキの設置によるエントランス性を演出する。
- ・また、センター前の霧の広場に陽射しを避けた休憩デッキや、希少種の観察デッキを設置するなど、駐車場利用者がセンターに立寄りたくなる空間を創出する。



②草原を望む休憩テラスの拡張 (県)

- ・草原を眺めながらゆったりとくつろげる空間を創出するため、既存のテラスを拡張する。
- ・テラスは、ビーナスラインや自然研究路からのランドマーク性にも留意し、自然保護センターへの利用者の誘導を図る。



③センター周辺歩道への誘導及び歩道の魅力向上 (県)

- ・自然研究路や霧の小みちについては、歩道起点が分かりづらいため、インターチェンジ駐車場において、案内標識の設置や歩道動線の明確化等により、歩道への誘導強化を図る。
- ・自然研究路の沿線では、電気柵設置による草原植生の再生が取り組まれていることから、再生の状況に応じて、解説標識の設置や資源性の高い区間についてのユニバーサル園路化、電気柵の延伸等について検討する。

④Free Wi-Fiの導入によるインバウンド対応強化 (県)

- ・霧ヶ峰を訪れた観光客（特に外国人旅行者）に自然保護センターに立ち寄ってもらい、インターネットを通じた情報収集や、霧ヶ峰での体験などを SNS 等で発信してもらうため、自然保護センターに Free Wi-Fi の導入を図る。

⇒詳細な施設イメージについては、p. 37以降のイメージスケッチ参照

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰は草原、湿原、樹叢からなる特徴的な自然環境に加え、古代の黒曜石や中世祭祀に関わる遺跡、近世以降に採草地として成立した草原など、人と自然との密接な関わりの中で形成された歴史・文化資源を有するなど、エコツーリズムに適したフィールドといえる。
- ・一方、生活様式や環境の変化により、草原の森林化、湿原の乾燥化、シカ食害、外来種繁茂など霧ヶ峰の特徴的な景観が失われつつある。そのため、霧ヶ峰自然環境保全協議会では霧ヶ峰自然保全再生実施計画を策定し、草原・樹叢の保全・再生のための雑木処理・優占植物の刈り取り、外来植物の駆除や希少種の保全等の取組を関係団体やボランティアの協力を得て実施している。
- ・自然保護センターは、関係機関やパークボランティアと連携し、自然研究路やシカ柵等の管理、ニホンジカライトセンサスやレンゲツツジ等に関する調査、忌避剤散布試験区管理、公園利用者に対するマナー啓発等を行っている。

【機能強化方針】

○霧ヶ峰のエコツーリズムの基盤である草原、湿原、樹叢が織りなす多彩な景観や自然環境の保全・再生を図り、将来にわたり持続的に質の高い自然体験の機会を提供する。

【具体的取組】

霧ヶ峰における自然環境保全・再生の取組は、霧ヶ峰自然環境保全協議会を中心に関係者の連携のもと実施されていることから、本項では、霧ヶ峰のエコツーリズム推進の観点から、自然保護センターを中心とした自然環境保全・再生に関する機能強化の取組を示す。

①ニホンジカの食害防止等による魅力ある体験フィールドの創出（県、地権者等）

- ・霧ヶ峰ではニッコウキスゲをはじめとする高原植物のニホンジカによる食害を防止するため、平成20年度より、県や霧ヶ峰自然環境保全協議会の構成員が電気柵等の設置を進めている。
- ・電気柵設置の効果については、ニッコウキスゲに留まらず植物全体の多様性を高め、また昆虫のチョウやハチの多様性も高めることが明らかにされていることから、電気柵設置エリアについてはエコツーリズムのフィールドとして活用することも期待される。センター周辺の自然研究路沿線では、地権者により電気柵が設置されていることから、草原植生の再生状況に応じて、電気柵の延伸等により草原植生の再生を図るエリアを拡充することを検討する。
- ・電気柵については維持管理の労力が大きく、設置後に柵内の森林化を抑制するための管理も必要となることから、土地所有者の理解を得た上で、効果が見込まれる箇所から設置していく。また、研究者等の協力を得て電気柵設置による影響・効果に関するモニタリングを実施する。

②参加体験型の外来種駆除や草原管理（自然環境保全協議会、ボランティア等）

- ・霧ヶ峰の草原は、かつては地元住民の採草などの共同作業により維持されてきた。しかし生活様式が変化した現在では、かつてのような生業と結びついた維持管理は望めない状況であり、その役割を地元のみで担うことは難しい。そのため、様々な主体が霧ヶ峰に関心を寄せ、保全・再生活動に参画を促すことが重要と考えられる。
- ・霧ヶ峰自然環境保全協議会では、ボランティアの参画を募りつつ、オオハンゴンソウ、ハルザキヤマガラシ、セイヨウタンポポ、ヘラバヒメジヨン、フランスギク等の外来種駆除や、草原再生のためニッコウザサ、ススキ、レンゲツツジ等の優占種の計画的な刈り取り等を実施している。
- ・今後は、参加体験型エコツアーとして、霧ヶ峰の草原景観の成り立ちや人と自然との関わりを理解してもらいつつ、草の刈り取りや外来種駆除等に参加するツアーの実施について検討し、都市圏等から参加者を募ることで、保全・再生活動への参加者の拡大や、霧ヶ峰を深く理解する利用者の拡大を図る。その際、参加・体験型ツアーの料金の一部を霧ヶ峰の保全・再生の取組に寄付するなど、エコツアーの収益を環境の保全・再生へと還元する仕組みの構築について検討する。

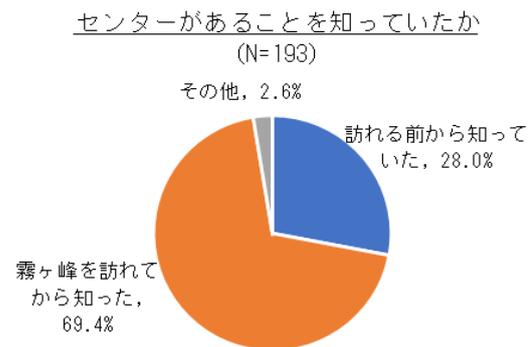
③保全・再生活動についての情報発信（県）

- ・霧ヶ峰の来訪者、子供達や若者をはじめとした地域の住民に対して、霧ヶ峰の草原の価値、人との密接な関わりの中で形成された歴史、現在の保全・再生活動の意義や取組を分かりやすく伝えることで、霧ヶ峰に対する理解を深めるとともに、保全・再生活動への参加を促す。
- ・そのため、上記①②で示したシカ対策や優占種の計画的な伐採等の取組について、研究者等の協力を得て、草原植生の遷移や草原の価値に及ぼす効果・影響等について把握・共有し、保全・再生の取組にフィードバックするとともに、自然保護センターの展示内容等に反映する。
- ・特に、自然保護センター前には電気柵を設置した草原が広がることから、草原の再生過程を観察することが出来るフィールドとしての活用や館内展示と連携した解説・学習等について検討する。

方向性-8 近隣施設等との連携

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰では、霧ヶ峰自然保護センター、車山ビジターセンター、八島ビジターセンターからなるビジターセンター連絡会がインタープリター養成講座を開催するなど、ビジターセンター間で連携した取組が進められている。
- ・一方、各ビジターセンターでは、霧ヶ峰の歩く利用を促すため、施設毎に散策マップ等を作成しているが、大半の観光客は八島湿原や車山肩に集中している状況にある。例えばビジターセンター間を歩いて移動するような広域の徒歩利用を促すためには、各ビジターセンターが連携した情報提供が求められている。
- ・霧ヶ峰自然保護センターの来訪者アンケートによると、センターの認知度が低く、来訪者の約7割が現地で訪れて初めて知った状況であることから、周辺施設等と連携して認知度を上げるための取組も必要である。



出典:霧ヶ峰自然保護センター利用者アンケート

【機能強化方針】

○近隣ビジターセンター、周辺の観光案内所、県内のビジターセンター等との情報提供の連携や、相互PRにより、回遊性を創出する。

【具体的取組】

①近隣ビジターセンターや観光協会等との連携による各ビジターセンター案内冊子（多言語）等の共同作成（県、各VC、地元自治体、観光協会）

- ・霧ヶ峰を訪れた利用者に、歩くことを通じて霧ヶ峰の魅力を体感してもらえよう、拠点となる「霧ヶ峰」、「車山」、「八島」の各ビジターセンターが共同し、案内パンフレットやセルフガイド用マップを作成することで、ビジターセンター間を歩いて移動するような利用を促す。また、マップ等については、歩く利用を嗜好する外国人旅行者に留意し多言語対応を図る。
- ・霧ヶ峰での二次交通の充実に向け、電気自動車の活用による周遊性向上が検討されていることや、観光協会と地元自治体が連携してタクシーの活用方法について検討していることから、これらの取組と連携し歩く利用環境を整えていく。

<事例>三陸復興国立公園「南三陸・海のビジターセンター」及び「石巻・川のビジターセンター」による共同刊行物

- ・三陸復興国立公園では、周辺部の里山・里海、集落地を含めた一定のまとまりをもつ地域を、森・里・川・海のつながりを感じられるフィールドミュージアムとして位置付けており、エコツーリズムや環境教育等の推進、地域の活性化に貢献する拠点として、「海のビジターセンター」、「川のビジターセンター」を設置している。
- ・両ビジターセンターでは、季節ごとのレポートとして共同の発刊物（VISI）を作成しており、各ビジターセンターで開催されるプログラム、施設・展示物、スタッフ等の紹介を行っている。



▲南三陸・海のビジターセンター、石巻・川のビジターセンター共同刊行物「VISI」

②山麓の観光案内所等との連携（県、観光協会、運輸事業者等）

- ・霧ヶ峰自然保護センターの認知度が低いため、来訪者が訪れやすい山麓の観光施設や公共交通機関の駅等において、自然保護センターの位置、役割や提供するサービスについて情報提供を図る。外国人旅行者については、自家用車での移動は少ないため、公共交通機関の駅等での情報提供に留意する。
- ・霧ヶ峰についたら「まず立ち寄ってみよう」と思ってもらえるような情報提供を行い、霧ヶ峰の自然・観光情報拠点として認識してもらえる場所を目指す。

③県内のビジターセンター等との連携（県・センター、県内のビジターセンター等）

- ・県内の国・県・市町村・民間が運営するビジターセンターとの連携を強化し、各施設の運営状況や活動内容等の情報共有や意見交換等を行う場を設けるなど、施設職員の研鑽に資する機会を確保する。
- ・また、各施設が提供するプログラム等を相互にPRすることで、他施設を訪れた来訪者に霧ヶ峰を次の目的地や周遊コースのポイントとして考えてもらえるような情報提供の連携を図るなど、利用者の回遊性を高める。

【現状と課題】

- ・霧ヶ峰自然保護センターは長野県が設置し、直営で維持管理・運営を行っている。
- ・自然保護センターには、自然公園管理員が配置（通年2名、夏季3名）されており、展示の解説・案内、自然観察会、自然情報の発信、施設の清掃・管理等の他、パークボランティアと協力して巡回、草刈り、シカ柵管理、調査、ビジターセンター連絡会の事務局等、多岐にわたる業務に従事している。
- ・今後、自然保護センターがエコツーリズムの拠点として機能強化を図っていくためには、地域で活動する様々な主体との連携・協働が不可欠であり、関係行政機関、ガイド事業者、観光協会、地権者、パークボランティア等と連携して管理運営の質の向上を図ることが必要となる。

【機能強化方針】

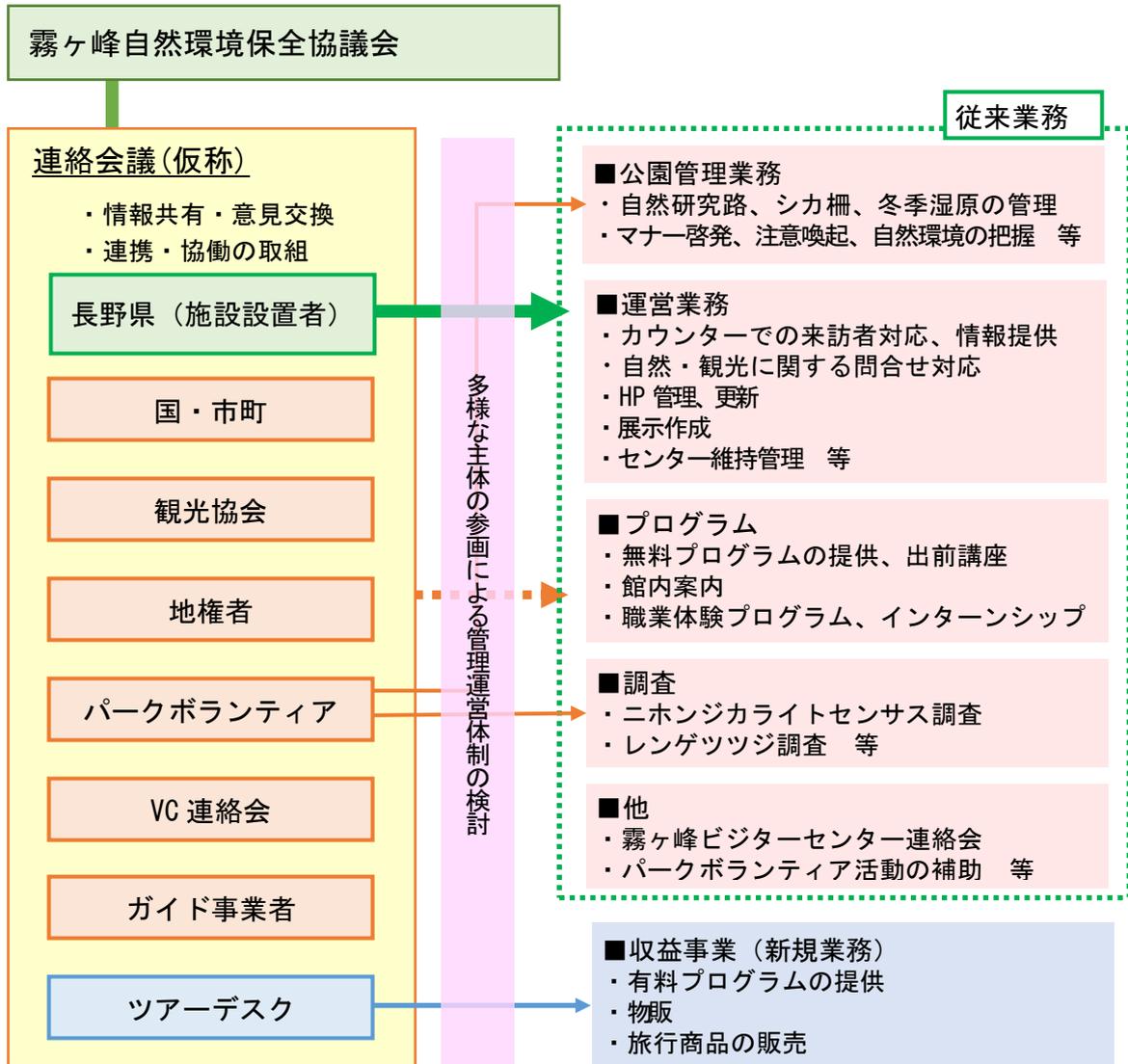
○自然保護センターの管理運営の充実を図るため、地域関係者による連絡組織を設立し、連携・協働による取組を進める。

【具体的取組】**① 多様な主体の連携による管理運営体制の構築（県、地域関係者）**

- ・自然保護センターの管理運営に関しては、施設設置者の責任で行う「施設管理」と、霧ヶ峰の適正利用に資する「運営」とに区分することが出来る。これまでは長野県直営による管理運営が行われてきたが、自然保護センターを拠点として実施するプログラムの提供等については地域で活動する団体の参画を図っていく。
- ・また、自然保護センターの従来業務であっても、ツアーデスクと関連の深い業務やパークボランティアの活動に適した業務（館内案内等）については、ツアーデスク事業者やパークボランティアがセンター職員と協力して従事する体制を構築することで管理運営の質の向上を図ることも考えられる。
- ・さらに、施設管理と運営とを一体的に民間事業者等が主体となって行うことが、自然保護センターの機能強化において有効と考えられる場合には、指定管理者制度の導入等についての検討を行う。
- ・多様な関係者が霧ヶ峰自然保護センターの取組に関する情報共有や意見交換を図り、上記のような連携協働による取組を進めるため、「霧ヶ峰自然保護センター連絡会議（仮称）」の設立を検討する。なお、当該連絡会議は「霧ヶ峰自然保護センター機能強化検討会」を母体として設立するとともに、霧ヶ峰自然環境保全協議会の下部組織として位置づけることを想定する。

■多様な主体による管理運営体制構築のための検討事項

- 多くの地域関係者による連絡会議（仮称）を設立するとともに、下記事項等を検討する。
 - *民間ツアーデスクの設置により収益事業を行い、収益の一部を管理運営に還元する仕組みを構築。
 - *パークボランティアとセンター職員とが連携した管理運営。（パークボランティアの活動範囲の拡大）
 - *県直営施設として地域との協働による管理運営のあり方や、指定管理者制度の導入による管理運営のあり方



②地域に精通した職員の確保 (県)

- ・自然保護センター業務は、自然地での施設管理や調査、利用者対応など、多岐にわたるため、地域を熟知した専門性の高い人材の長期的確保が課題であることから、センター職員の雇用期間延長等について検討する。

【参考】施設整備のイメージ

次ページ以降に霧ヶ峰自然保護センターの機能強化に関する現段階での施設整備の取り組みイメージを示す。次年度以降、維持管理・運営手法や地権者との調整状況を踏まえて、設計等の検討を進める予定である。





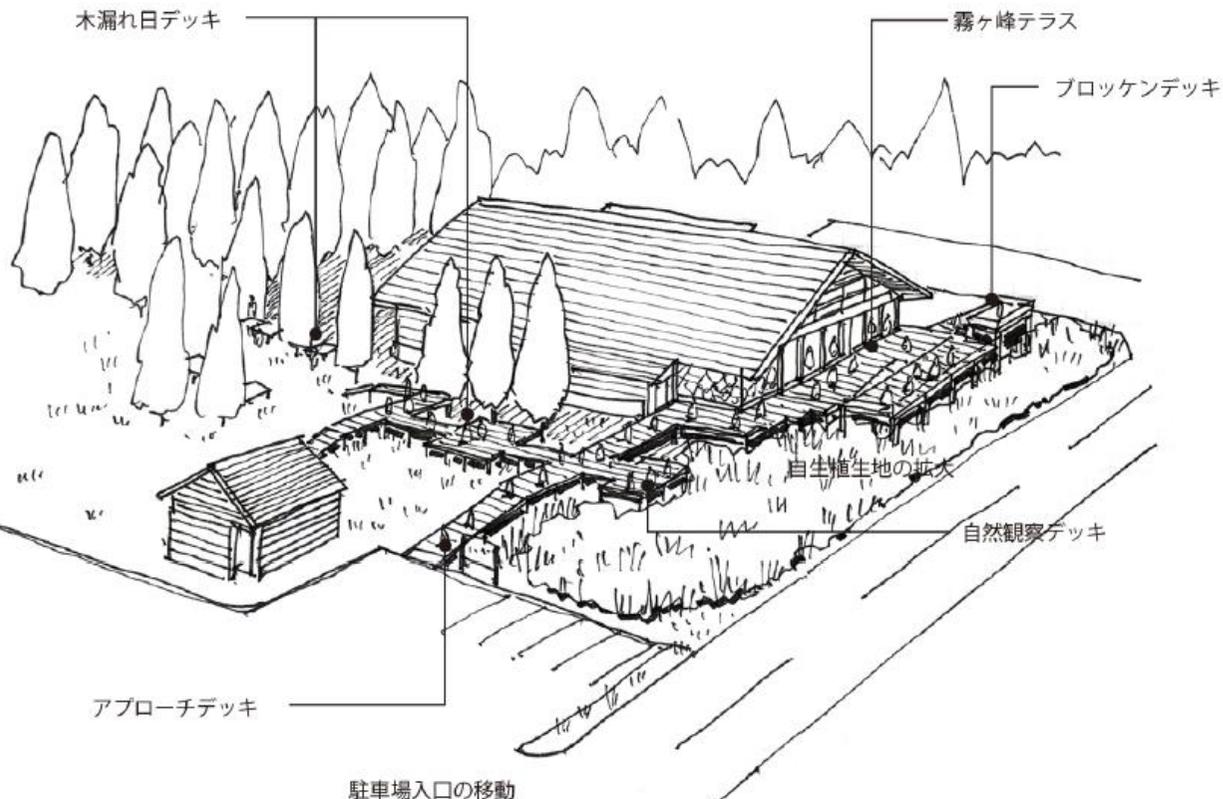
霧ヶ峰テラスのイメージ (参考: 軽井沢ハルニレテラス)



現況写真



keyplan



霧ヶ峰テラスイメージスケッチ

霧ヶ峰テラス・・・展示室内と屋外デッキが一体となるテラスの設置。
テラスの高さを 50 cm、1 m の 2 段階で上げることで、自然観察エリアを一望できる。
デッキの高さを上げ、周囲からの視認性を高める。

アプローチデッキ・・・駐車場からのエントランス性を演出するため、デッキを設置によりアプローチ機能を高める。

自然観察デッキ・・・自生する希少種植生の観察デッキを設置。

木漏れ日デッキ・・・既存樹残しながら、休憩デッキを設置。飲食可能。
樹林地の中にも数台の縁台を設ける。

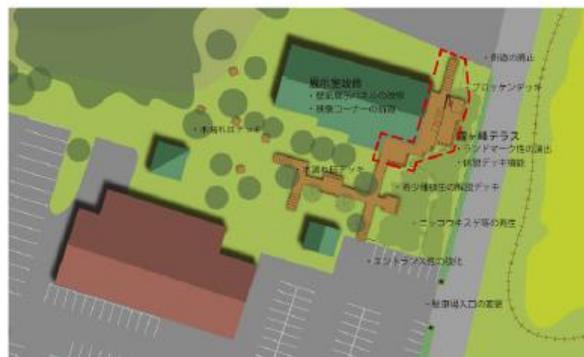
ブロッケンデッキ・・・
一番高いデッキを設け、周辺に霧が発生した時に、照明設備により人工的にブロッケン現象を作り出す。



ブロッケン現象
太陽などの光が背後からさしこみ、影の側にある雲粒や霧粒によって光が散乱され、見る人の影の周りに、虹と似た光の輪となって現れる大気光学現象。

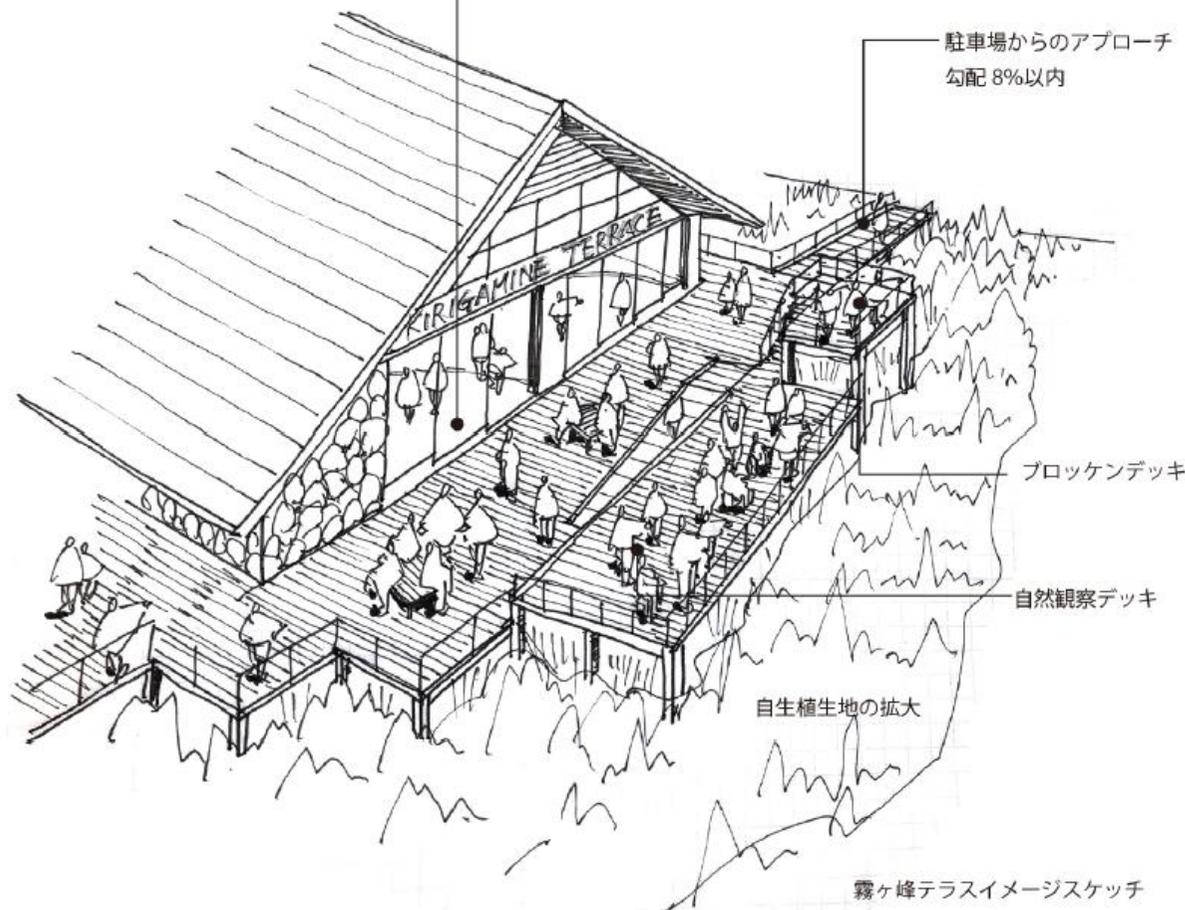


現況写真



keyplan

展示室内と屋外デッキが一体となるテラス



霧ヶ峰テラスイメージスケッチ



展示室全体照明の調光
 基本的に展示パネル及び展示物への照度を上げ。季節による色温度を変えることで、より快適な展示空間を演出する。

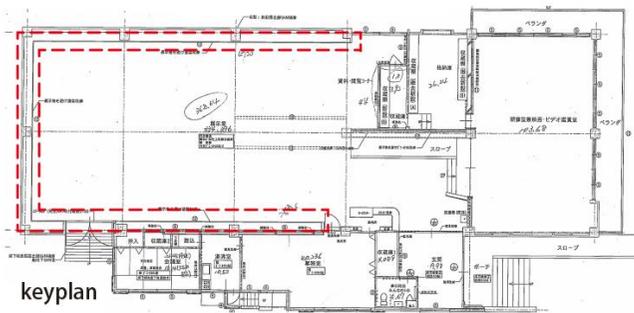
夏期の照明
 白色を基調とした色温度の低い照明を基調として、空間に涼しさと安らぎを与える。



冬期の照明
 暖色を基調とした色温度の高い照明を基調として、空間に暖かさと明るさを与える。



現況写真



keyplan



霧ヶ峰テラスイメージスケッチ

展示フレームの改修・・・基本的に現状の展示パネルを利用しながら、各テーマごとをわかりやすくするために木製フレームでアクセントをつけ、照明色により各テーマを見やすく解説する展示パネルとする。

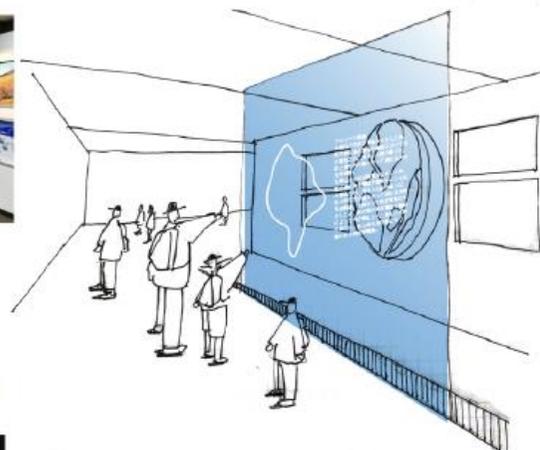
また展示フレーム内には解説パネルの他、ボックス型パネルも設置、現在の個別のショーケースなどの整理を行い、可変自由の展示構成を行う。



可変展示フレームのイメージ (参考：ふじのくに地球環境史ミュージアム)



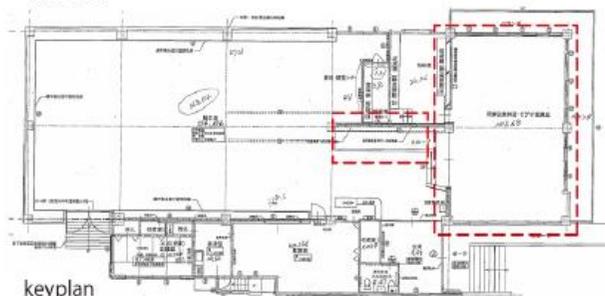
現況写真



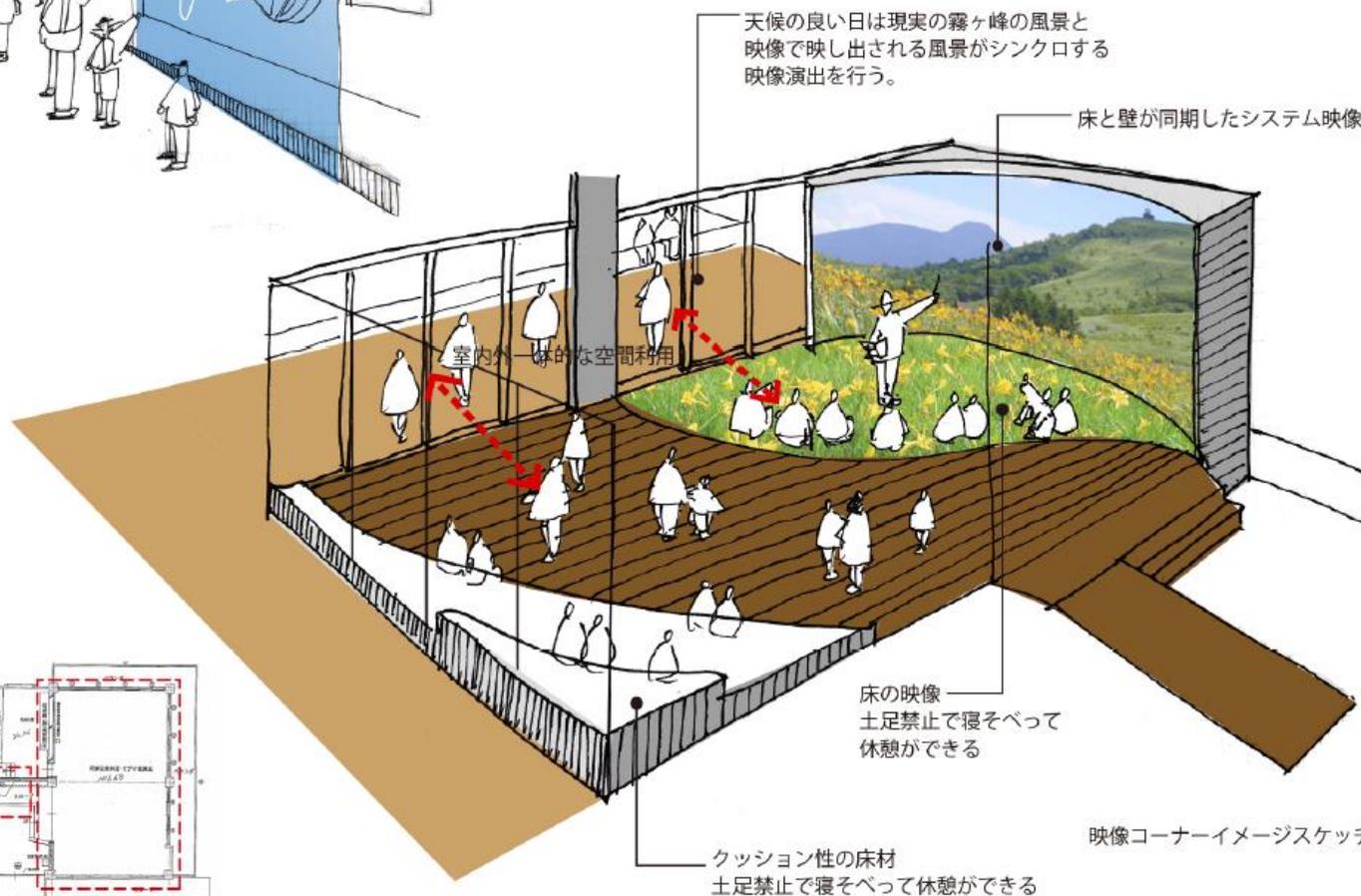
複合総合案内サイン
 カウンター前に置かれている解説員による様々なサインを、整理編集を行い、強化ガラス板にまとめた形で設置する。
 ガラスサインの為、後部の地図サインや四季の風景写真に影響なく設置する。



現況写真



keyplan



天候の良い日は現実の霧ヶ峰の風景と映像で映し出される風景がシンクロする映像演出を行う。

床と壁が同期したシステム映像

室内が一体的な空間利用

床の映像
 土足禁止で寝そべて休憩ができる

映像コーナーイメージスケッチ

クッション性の床材
 土足禁止で寝そべて休憩ができる